

# 青森市立油川中学校

---

**生徒一人一人が輝ける居場所をつくるために、自己肯定感、自己有用感を高める指導の在り方**



## I 学校の概要

### 1 学校の概要

本校は、生徒数323名（男子178名、女子145名）の学校である。体育祭や文化祭等学校行事では、異年齢集団の交流を積極的に行っている。また、キャリア教育の一環として、小学校の体育デーにおける応援活動や、文化祭での作品交流などの小中連携にも力を入れている。

### 2 学校経営方針

公教育の大きな使命は「人間尊重の精神に基づき、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな人間を育成すること」である。このことを受け、「教育は人づくり」という原点に立ち、「礼節を尊び、勉学に励む生徒」の育成を目指す。そこから、「個を生かし、豊かな学力を育む教育」を進める。基本方針として以下の4つを掲げる。

- (1) 「対話」を基底とした教育活動を進める。 (傾聴)
- (2) 「個」を育て、集団を高める教育活動をすすめる (集団の自浄力)
- (3) 「和」を大切にし、全教職員で教育活動をすすめる (情報交換、記録)
- (4) 上記の(1)～(3)を含めて、本物かどうか確かめながら「本気」で前向きに教育活動をすすめる。

## II 研究の概要

### 1 研究主題

生徒一人一人が輝ける居場所をつくるために、自己肯定感、自己有用感を高める指導の在り方

### 2 主題設定の理由

「生徒指導困難校」と言われた本校が、少しずつ落ち着きを取り戻してきている。それは、人間の行動の土台となる「心」を、本校の教職員が力を合わせて、耕し続けてきた成果であると思っている。その心を耕す上で、特に力を入れて取り組んできたのが、平成25年度から「心を耕す」を合い言葉として取り組んできた「道徳教育」と、自己を見つめ、学ぶことや働くことの尊さを実感させ、生き方を考えさせる「キャリア教育」である。

本校では学校課題として、①学力の向上、②表現力の向上、③自治的な態度の向上の3つを挙げている。この原因の1つとして考えられているのが、自己肯定感や自尊感情に乏しい面があることである。

これらのことを踏まえ、今まで取り組んできた、キャリア教育における基礎的・汎用的能力について自分を見つめることができる「キャリアノート」、生徒が自分自身の長所に気付いたり、対人関係を改善していくことに活用できる道徳での「エゴグラム SHE」及び「アセス」を活用しながら、道徳教育とキャリア教育をさらに充実させていくことで、生徒の自尊感情が高まり、他人へ対する思いやりの心が深まり、人間関係を自分たちの力で改善し、よりよいものにしていくことができると考えた。結果として学校課題の解決につなげていくことを目指している。

### 3 研究の目標

道徳教育とキャリア教育を関連させながら、学校適応感を捉えることができるアセスを活用し、生徒の学校適応感を数値化して、全教職員の共通理解の下で指導にあたることによって、本校生徒の課題である自己肯定感や自己有用感を向上させ、生徒一人一人が輝ける居場所づくりをすることができるための指導を明らかにする。

### 4 研究方法の概要

平成28年度・29年度ともに以下の項目を基本的な研究方法とし、計画的、組織的に関連性をもたせて指導にあたる。

#### (1) 校内体制の整備

- ・いじめ防止対策委員会の実効性のある取組
- ・生徒指導部、研修部等、各分掌間の横の連携
- ・各学年間の情報共有

#### (2) 居場所づくり・絆づくり

##### ①道徳教育の充実

- ・道徳の時間の指導の工夫
- ・心を耕すシートへの記入（各学期に1回）
- ・エゴグラム&SOBAセット実施

##### ②キャリア教育の充実

- ・キャリアノートの活用
- ・各領域、各教科との関連を図った指導
- ・小中連携

##### ③生徒指導の三機能を生かした授業づくり

##### ④縦割り活動

- ・各種行事における異年齢集団の交流（トラスト活動）

#### (3) 地域の人材の活用

- ・PTA校外委員・民生委員・学校評議員・地域の警察等との連携
- ・小・中連携推進会議での生徒指導部による情報交換

#### (4) 実態把握

- ・アセス検査実施（2回）※平成29年度は年3回
- ・校内研修
- ・分析と職員間の共通理解

#### (5) その他

- ・日々の授業を大切にしたい、わかる授業の実施
- ・ボランティア活動の実施（学年や部活動単位の交流、ベルマーク等の収集活動）
- ・二者面談、三者面談、家庭訪問の実施

平成28年度の指導の結果を踏まえ、以下を平成29年度新たな内容として取り入れた。

[平成29年度追加事項]

【課題解決までの過程】

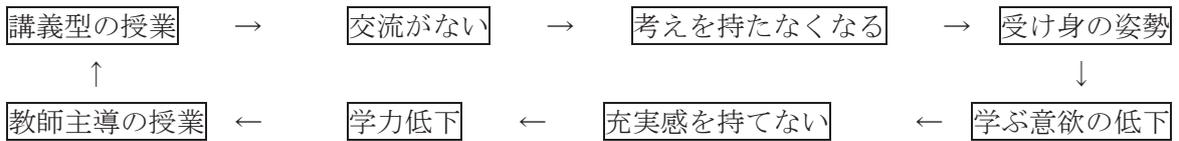
最終ゴール：児童生徒一人一人が輝ける居場所づくり・他の人との絆づくり

↑  
学校課題：学力向上

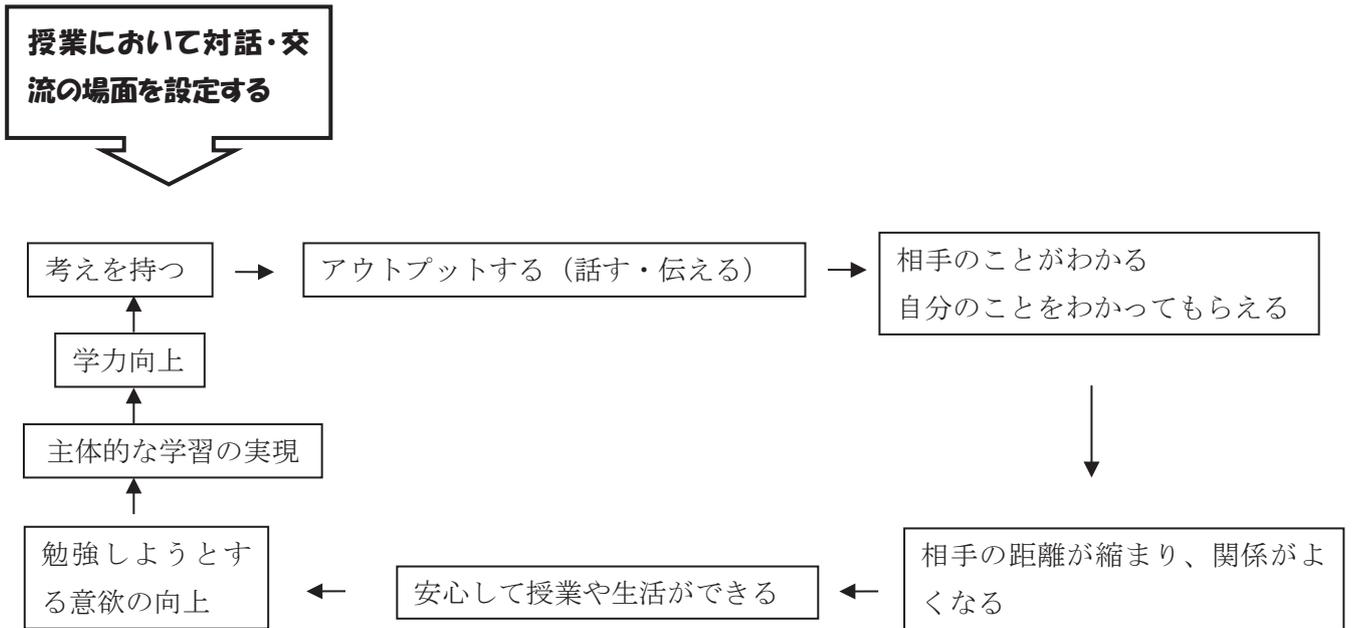
↑  
学校課題：人間関係づくり

↑  
取組：各教科・学活・総合・道徳等で、対話を通して協働的に学ぶ場を意図的に設定した授業づくり

【これまでの授業のサイクル】



【対話を通して協働的に学ぶ場を意図的に設定した授業のサイクル】



- ・各教科・学活・総合・道徳等の授業で主体的に考えるきっかけづくりとして、対話や交流する場を意図的に設定していく。
- ・主体的に考え、授業に参加させることが学校課題解決につながるのではないか。
- ・大集団だと考えをもてない（もたない）生徒も、対話や交流する場面を設定することで主体的に自分の考えをもつようになるのではないか。
- ・対話を通して協働的に学ぶ授業スタイルが本校の学校課題である、学力向上や良好な人間関係づくりにつながり、本事業の目的達成に迫っていけるのではないかと考える。

### Ⅲ 研究の実際

#### 1 実践記録

##### (1) 校内体制の整備

いじめ防止対策委員会を設置し、計画的・組織的な指導を行った。基本的な生活習慣アンケート、学校生活アンケート、いじめアンケートなどの各種アンケートを定期的実施し、それらの内容を学年会議や職員会議を通して情報交換の徹底を図ることができた。

##### (2) 居場所づくり・絆づくり

###### ① 道徳教育の充実

授業時間を確実に確保しながら道徳の授業を行うことができた。また、年度始めや講師を招いての全校道徳の実施や、エゴグラムや SOBA セットで自他の見つめる時間を意図的・計画的に設定した。各学期の最後の授業では、全校生徒に「心を耕すシート」に道徳の時間の感想を記入させることで、心の変容を感じさせるようにしている。

###### ② キャリア教育の充実

職場訪問や職場体験、修学旅行への計画・実施、職業講話や生き方講演会を実施した。また、本校応援団が学区内2校の小学校へ出向き、応援活動を行うなど、小中連携の充実も図ってきた。

###### ③ 縦割り活動

体育祭や文化祭等の行事では、活動の計画・準備・実施まで縦割り活動を取り入れ、事後の活動として、振り返りのワークシートや、メッセージ交流を実施することで、自己肯定感や自己有用感の高まりへとつなげた。

##### (3) 地域人材の活用

各委員、小学校との連携を密にし、学校教育を進めた。

##### (4) 実態把握

アセス検査は、初年度2回、最終年度3回の計5回実施し、それぞれの結果を分析し、全教職員の共通理解の下、その後の指導に役立てた。また、道徳の授業と連携し、エゴグラムや SOBA セットの分析結果と関連させながら指導を行った。

##### (5) その他

各教科、道徳の時間では、対話を通じた協働的な学びの場を意図的に設定し、主体的な学びになるよう心がけ、わかる授業へ近づくための工夫を取り入れた。

## 2 アセスの検証結果と分析

表1 〈平成28年度 アセス検査結果〉

	各因子	1年生（現2年生）		2年生（現3年生）		3年生（現高校1年生）	
		1回目 7月実施	2回目 12月実施	1回目 7月実施	2回目 12月実施	1回目 7月実施	2回目 12月実施
①	生活	57	55	57	57	54	<b>54</b>
②	教師	60	59	56	<b>59</b>	53	<b>55</b>
③	友人	61	60	58	<b>59</b>	55	<b>55</b>
④	向社会	58	57	58	<b>60</b>	55	<b>57</b>
⑤	非侵害	66	63	62	<b>64</b>	58	<b>58</b>
⑥	学習	52	49	54	51	48	47
※	対人	61	60	59	<b>60</b>	55	<b>56</b>

表2 〈平成29年度 アセス検査結果〉

	各因子	1年生			2年生			3年生		
		1回目 5月実施	2回目 7月実施	3回目 12月実施	1回目 5月実施	2回目 7月実施	3回目 12月実施	1回目 5月実施	2回目 7月実施	3回目 12月実施
①	生活	62	60	58	60	58	<b>61</b>	58	58	<b>58</b>
②	教師	62	61	<b>62</b>	59	60	<b>66</b>	57	56	<b>60</b>
③	友人	63	61	<b>63</b>	62	61	<b>65</b>	57	58	<b>60</b>
④	向社会	55	56	<b>57</b>	60	59	<b>63</b>	57	59	<b>59</b>
⑤	非侵害	68	68	<b>69</b>	66	66	<b>68</b>	64	64	<b>66</b>
⑥	学習	62	59	56	53	51	51	55	53	53
※	対人	62	61	<b>63</b>	62	62	<b>66</b>	59	59	<b>61</b>

### 【表1・2の考察】

- ・各学年とも全体の数値は比較的高い。数値が60を超える因子もある。
- ・平成29年度においては、第1回目と第3回目を比較した場合、数値に上昇が見られるものが多く、特に対人的適応を表す数値が維持または上昇している。
- ・学習的適応感の数値がやや劣り、また下降している。やはり本校の学校課題の1つである。

表3 〈平成28年度 アセス検査の数値が40を下回っている生徒〉

	因子	1年生（111人）		2年生（118人）		3年生（116人）	
		1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
①	生活	8人	7人	8人	6人	14人	9人
②	教師	10人	11人	8人	5人	19人	20人
③	友人	5人	7人	5人	5人	5人	10人
④	向社会	4人	7人	4人	6人	6人	10人
⑤	非侵害	5人	6人	4人	3人	5人	3人
⑥	学習	16人	28人	13人	18人	26人	38人

表4 〈平成29年度 アセス検査の数値が40を下回っている生徒〉

	因子	1年生(94人)			2年生(111人)			3年生(118人)		
		1回目	2回目	3回目	1回目	2回目	3回目	1回目	2回目	3回目
①	生活	2人	7人	⇒ 5人	5人	5人	⇒ 4人	7人	⇒ 6人	⇒ 3人
②	教師	2人	4人	⇒ 2人	7人	⇒ 6人	⇒ 1人	7人	8人	⇒ 6人
③	友人	4人	⇒ 3人	4人	7人	7人	⇒ 2人	2人	5人	⇒ 3人
④	向社会	8人	8人	⇒ 5人	4人	⇒ 2人	⇒ 1人	9人	⇒ 4人	5人
⑤	非侵害	3人	3人	⇒ 1人	3人	3人	⇒ 2人	2人	⇒ 1人	2人
⑥	学習	2人	2人	6人	17人	18人	20人	10人	16人	⇒ 13人

【表3・4の考察】

- ・ 適応状態が悪いと考えられる生徒が、①～⑥の各因子とも存在する。
- ・ 数値が40を下回る生徒が最も多いのは、⑥の学習的適応感である。→本校の学校課題の1つ
- ・ 人間関係に関する項目である②～⑤の因子（対人的適応感）が40を下回る生徒が存在する。人間関係の構築が得意ではなく、トラブルになることが多い。数値が30を下回り早急かつ、継続的な支援が必要な生徒もいた。→学校課題の1つ。
- ・ 同じ生徒が1回目、2回目ともに支援が必要と判断されることが、人数の増加または、同じ人数へとつながっている。

IV 成果と課題

【成果】

毎回のアセスの結果を分析し、教職員で情報交換を図りながら指導を進めた結果、多くの因子で数値が上昇した。特に対人的適応感を示す因子では、各学年とも全ての因子で上昇または、高い数値での維持が見られた。道徳教育やキャリア教育、縦割り活動を柱とした特別活動などの効果が表れているといえる。また、校内研修等を通して学級集団・学年集団づくりのアプローチの仕方を学ぶことで、本校の経営方針にもある「集団の自浄力」を高めることにもつなげることができた。居場所づくり・絆づくりにつなげることができたといえる。

【課題】

集団での数値の上昇へとつなげることができた一方で、数値が40を下回る生徒がいることも事実である。一人一人の心理状態を理解し、教師、仲間との信頼関係を構築し、一人一人にとって安心できる集団になるように、今後もさらにきめ細やかな指導にあたっていかなければならない。また、本校の学校課題である、学習面へのアプローチも継続していかなければならない。

V 参考文献

栗原慎二 (2010) 『アセスの使い方・活かし方』 ほんの森出版

# 深浦町立大戸瀬中学校

---

**アセスの結果を取り入れた  
授業改善を通して、生徒の  
自己有用感を高める研究**



## I 学校の概要

### 1 学校の概要

本校は、生徒数56名の小規模校である。校舎は山と海に囲まれた自然環境に恵まれた地域にあり、その中で育った生徒は、純朴であり、全体的に穏やかで、素直な性格の持ち主である。

地域との連携も密で、漁業協同組合等からの支援が手厚く、体育大会や文化祭などといった行事の他に、学校の裏にそびえる追上山に登る全校登山や地域の相撲道場から講師を招いて行う相撲教室や全校相撲大会などもある。さらに、漁業協同組合婦人部の方々が地元で獲れたイカや魚を使って子どもたちと一緒に調理するお魚料理教室というものがある。これは各学年、年に1回ずつ行われ、生徒は魚やイカのおろし方や調理の仕方を教えてもらっている。更に、1年生では、漁船に乗り、実際に定置網での収穫を体験する網起こし体験や漁業協同組合で行う海難救助訓練への参加などもある。このような体験を通じて、地域のよさを知り、地域の方々とふれあうことができている。

### 2 学校経営方針

#### (1) 経営スローガン「今に生きる」

「大切なのは、かつてでもない、これからでもない、一呼吸、一呼吸の今である」 坂村真民。今を大切に生きる生徒は、自身の描く輝かしい未来をつかみ取ることができる。これを基本理念に、全教職員で取り組む学校をつくる。

#### (2) 校訓

- ① 「英知」 …… 次代を創造的に生きるための深い英知を磨く
- ② 「寛恕」 …… 自己本位の心を脱し、他人の身になって考える思いやりのある心を養う
- ③ 「鍛錬」 …… 人格を基本として、心を練り、体を鍛える

#### (3) 教育目標

夢と志を持ち、真剣に学習に取り組み、心身ともに健康な生徒

【学力】しっかりとした目標を持ち、全力で学習に取り組む生徒

【心情】思いやりと感謝の心を持ち、仲間と協力し合える生徒

【体力】あきらめることなく、進んで身体を鍛える生徒

#### (4) 学校経営の基本方針

教育は、一人一人の生徒の人格の向上と完成を目指して行われるものである。また、変化の激しい現代にあっては、豊かで潤いのある社会の形成者として、健康な身体をもち、生きる力を身に付けた生徒の成長を期して行われなければならない。これらのことに鑑み、深浦町の将来、青森県の将来、日本の将来、ひいてはこれからの世界を担う人づくりのため、「教育は人づくり」という原点に立って、夢や志の実現に向け、知・徳・体を育む学校教育の推進に努めたい。その推進にあたっては、全教職員が一丸となってチーム大戸瀬中学校として立ち向かっていくことを心がけたい。

## II 研究の概要

### 1 研究主題

アセスの結果を取り入れた授業改善を通して、生徒の自己有用感を高める研究

### 2 主題設定の理由

本事業は、いじめ・不登校等の生徒指導上の課題を克服し、生徒が安心できる学校づくりの在り方を考察することを目的とした事業である。

幸い、本校ではいじめアンケート等により深刻ないじめは把握されていない。ただ、この現状に甘えるわけにはいかない。昨年度は、青森県内でもいじめにまつわる心痛ましい事案が発生し

ている。そのため、いじめはいつおこるか分からないものであることを心に刻み、日々の教育活動に取り組んでいく必要がある。不登校についても、県内では減少傾向にないことを考えれば、危機意識を持った対応をしていかなければならない。

特に取り組みの中心としては、授業改善と生徒と教師が相互の協力によってつくり上げる授業づくりにスポットを当てながら取り組みたい。生徒は、一日の大半を教室その他の場所で授業を受けることによって過ごしている。その授業が、満足のいくものでなければ、生徒の充足感は生まれないはずである。荒れる学校の生徒の発言として、こんなものがある。「授業がつまらない。授業が分からない。そんなことがあるから教室を抜け出すんだ」実に悲しい発言である。しかし、授業改善に取り組み、授業が生徒のものに変わり始めると、学校は見違えるように様変わりしていくものである。授業が生徒を変え、学校を変えるのである。この考えを、我々は研究のベースに据えて取り組んできた。

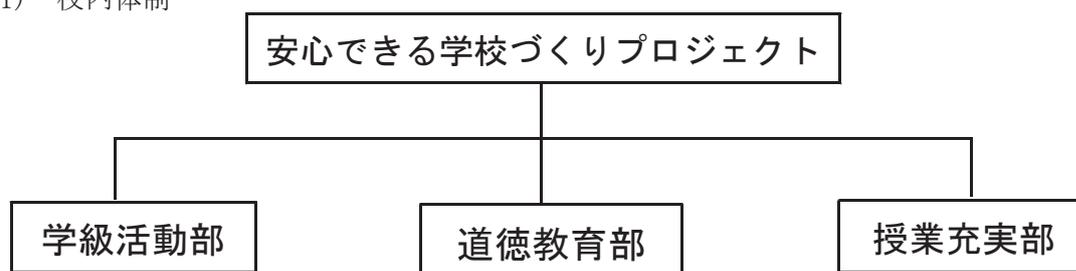
アセスでつかんだ生徒の実態を、授業の中での改善を第一義に考え取り組むことによって、自己有用感の獲得、授業成立と学校生活の充実という姿で表したい。

### 3 研究目標

生徒の自己有用感を高めるために、アセスの結果を基に生徒の実態を捉え、主体的・対話的な授業を実践することが有効であることを実践的に明らかにする。

### 4 研究方法の概要

#### (1) 校内体制



- ① 学級活動部……学級を中心に話し合い活動の計画や各行事への意欲的に取り組むための活動に取り組む。また、全校パネルディスカッションの企画・運営を行う。
- ② 道徳教育部……生徒の心に響く教材・題材の選定を行う。全校道徳、各教員による道徳の公開授業の計画をする。
- ③ 授業充実部……授業づくりスタンダードに基づく授業のあり方、主体的・対話的な授業をするための言語活動について検討会の計画を行う。

#### (2) 授業力の向上と指導方法の工夫改善から

- ・授業づくりスタンダードに基づいた授業づくり研究を深める。
- ・学習課題の提示と学習の流れ、まとめ、振り返りという授業スタイルについて確認する。
- ・主体的・対話的な授業に取り組むための言語活動について研究を深める。
- ・自主的な公開授業を実施することによって、授業者の意識の高揚を図るとともに授業改善に向けての職員の意欲の高揚を図る。

#### (3) 道徳教育の充実から

- ・全校生徒と全教職員による全校道徳の実施。(学期に1回)
- ・学校長による道徳の公開授業の実施。
- ・各教員による道徳の公開授業の実施。

- ・ 道徳の資料整備に努めるとともに、生徒の事後の感想等の整理を行う。

(4) 生徒の実態把握の観点から

- ・ 年3回のアセスの実施と実態の把握。
- ・ アセスの結果に関する情報交換会の実施。
- ・ 実施後の手立てによる生徒の変容の確認。
- ・ 諸調査やアンケートによる変容の確認。

## 5 研究経過

活 動 内 容	
28年度研究内容	29年度研究内容
<p><b>【全体】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 「アセスについての学習会」 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 6 / 16 県総合学校教育センター 指導主事 大場 康之先生</li> </ul> </li> <li>○ アセスの実施と全体検証会 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 5 / 23 第1回アセス実施</li> <li>・ 5 / 30 第1回アセス全体検証会</li> <li>・ 11 / 29 第2回アセス実施</li> <li>・ 1 / 23 第2回アセス全体検証会</li> <li>・ 3 / 6 第3回アセス実施</li> </ul> </li> <li>○ 諸調査・アンケートの実施</li> </ul>	<p><b>【全体】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ アセスの実施と全体検証会 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 5 / 19 第1回アセス実施</li> <li>・ 5 / 31 第1回アセス全体検証会</li> <li>・ 9 / 25 第2回アセス実施</li> <li>・ 10 / 17 第2回アセス全体検証会</li> <li>・ 2 / 7 第3回アセス実施</li> <li>・ 2 / 20 第3回アセス全体検証会</li> </ul> </li> <li>○ 諸調査・アンケートの実施</li> </ul>
<p><b>【学級活動部】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 行事の前後に目標設定や活動の振り返りの学級活動</li> <li>○ 全校パネルディスカッション <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 5 / 2 「いい学校ってどんな学校」</li> <li>・ 6 / 15 「体育大会について」</li> </ul> </li> </ul>	<p><b>【学級活動部】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 行事の前後に目標設定や活動の振り返りの学級活動</li> <li>○ 全校パネルディスカッション <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 6 / 15 「体育大会はなぜ行われるのだろうか」</li> <li>・ 7 / 4 「体育大会で何を学んだか？」 「日常生活にどう生かしていく？」</li> <li>・ 10 / 2 「大中祭は、なぜ行われるのだろうか？」 「大中祭を成功させるために何が できるだろうか？」</li> <li>・ 10 / 17 「大中祭で学んだものは何？」 「学んだことをどう生かしたい？」</li> </ul> </li> </ul>
<p><b>【道徳教育部】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 全校道徳 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 4 / 8 「吉田松陰」</li> </ul> </li> <li>○ 学担以外の教師による道徳の授業の実施 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 各学級で年間6回実施</li> </ul> </li> </ul>	<p><b>【道徳教育部】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 全校道徳 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 4 / 10 「中江藤樹」</li> </ul> </li> <li>○ 学担以外の教師による道徳の授業の実施</li> </ul>

<p>【授業充実部】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 先進校への視察 秋田県能代市立能代東中学校 ・ 6 / 3 実施 ・ 11 / 29 実施</li> <li>○ 「アクティブラーニングについての学習会」 ・ 7 / 19 県総合学校教育センター 指導主事 袴田 康夫先生</li> <li>○ 授業研究会 ・ 9 / 1 秋田県三種町立山本中学校 教科専門監 大高 智久先生</li> <li>○ 生徒指導事例研修会 ・ 9 / 20 五所川原第一高等学校通信制 副校長 大橋 行博先生</li> <li>○ 研究授業指導案検討会 9 / 29</li> <li>○ 計画訪問・授業検討会 ・ 11 / 17 全校総合的な学習 「再考（最高）ふかうら北金ヶ沢 K-1 グランプリ」</li> </ul>	<p>【授業充実部】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 先進校への視察 秋田県能代市立東雲中学校 ・ 5 / 24 実施 ・ 6 / 15 実施</li> <li>○ 計画訪問・授業検討会 ・ 6 / 26 道徳（1学年）</li> <li>○ 要請訪問・授業検討会 ・ 9 / 25 英語（2学年）</li> <li>○ 研究発表会 ・ 11 / 17（公開授業・全体会・全体協議会）</li> </ul>
---	--

### Ⅲ 研究の実際

#### 1 各プロジェクトの取り組み

(1) 学級活動部では、行事において、事前・事後の活動を重視し取り組んだ。一例として、体育大会における全校パネルディスカッションを紹介する。

##### ① 事前活動のテーマ「なぜ体育大会を行うのだろう」

・ 生徒から出された意見

「全員の絆を深めるため」「学年を越えて全校で協力するため」  
「みんなと協力して一つのことを成し遂げるため」「自分の役割をしっかりと果たすため」「体力向上のため」など

##### ② 事後活動のテーマ「体育大会で何を学んだ」と「体育大会で学んだことを日常生活にどう生かしていったらよいのだろう」

・ 「体育大会で何を学んだ」で出された意見

「勝ち負けに関係なく仲間と協力し合うこと」「何事にも諦めないこと」「地域の方や保護者に感謝すること」など

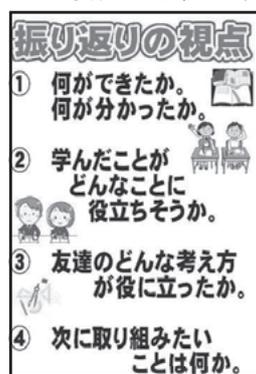
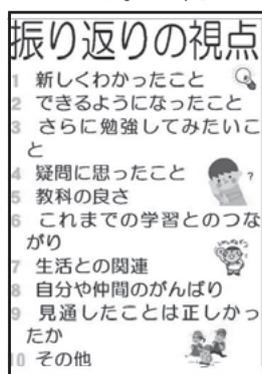
・ 「日常の生活にどう生かしていくか」で出された意見

「自分の仕事を責任をもって行う」「委員会・学級の仕事など頑張る」「グループや授業で話し合う」「出来ないことでも出来るまで努力する」など

行事という一つの点が、日常生活という点と結びつき、全教育活動において生徒の成長・発達につながっていくのだということを、生徒も感じ始めているように思われる。



- (2) 道徳教育部では、全校道徳を1回、28年度には、学担以外の教師による道徳の授業も年間6回執り行った。毎週金曜日発行の校長通信「今に生きる」の裏面に掲載された講話をもとにした道徳も行われている。
- (3) 授業充実部では、昨年度から提示されている大戸瀬中学校授業づくりのスタンダードに基づいた授業づくりの在り方についての検討会を行った。また、総合学校教育センターから講師を招いて、アクティブ・ラーニングについての研修会や授業研究会を開催した。さらに、能代市立能代東中学校と東雲中学校を訪問して学んだことや今後授業に取り入れたいこと等について精査した。
- ① 「学習課題」、「学習の流れ」、「まとめ」、「振り返り」という学習プレートを提示した授業を執り行う。生徒も学習の流れをつかみやすくなる。
  - ② 学習課題は、黄色のチョークで囲む。視覚に困難をきたしている生徒に対する配慮等として心がける。また、生徒の言葉で提示するなど、学習そのものが生徒のものになるよう配慮する。
  - ③ 学習課題提示後に「ゴール」（学習のまとめ：本時の評価規準）を示し、それに向けて学習に取り組ませる。
  - ④ 生徒が達成感と充実感を獲得できるような授業をつくり上げるため、「主体的学習」と「対話的学習」の場を、授業に効果的に取り入れる。
  - ⑤ 「振り返りの視点」を活用して、授業を通しての達成感と自己有用感を味わえるようにする。生徒にお互いの頑張りを認め合わせることは、自己有用感を味わわせるのに効果的であった。



H28の「振り返りの視点」 H29の「振り返りの視点」

#### (4) 授業研究

##### ① 提案授業 1年道徳（平成29年6月26日）

主題名「相互理解・寛容」《内容項目B-（9）》

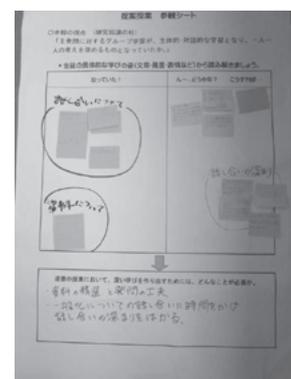
資料名「ブランコ乗りとピエロ」（私たちの道徳5，6年）

主体的な学習：終末に「今までの生活の中で、この作品と同じような体験をしたことはないだろうか。」と問いかけをし、生徒に自分自身を振り返らせる。

対話的な活動：展開部分の発問について、意見交流する場を設ける。人によっていろいろな考え方があることを確認させ、自分の考え方の幅を広げさせるようにした。

研究協議では、授業を通して「道徳の授業において、深い学びを作り出すためには、どんなことが必要か」について考えた。

- ・資料の精選と発問の工夫が重要
- ・考えを深めるために意見交流は効果的
- ・話し合いの時間の確保
- ・意見が対立する場面をつくる など



② 提案授業 2年英語

単元名 Lesson 5 Career Experience (TOTAL ENGLISH 3 学校図書) 3 / 7

主体的な学習：学習課題の自力解決させる

対話的な活動：学習課題についてグループ話し合い，意見をまとめる。

授業では，年間を通じて，「自分の考えを持つ」→「ペアや集団で話し合う」→「学習内容を振り返る」という流れで実施。

研究協議では，2つのテーマについて考えた。

「対話的な学習を効果的にするためには，どんなことが必要か」

- ・グループ活動では役割分担を決める。話し合いのルール（司会を持ち回りにする）やシナリオがあるといい。
- ・学習の流れのパターン化（自己解決→学び合い→発表）
- ・取り組みやすい手立てやヒントの提示・出すタイミング，教師の助言や意図的アナウンス
- 「振り返りの中で生徒の自己有用感を高めさせるためには，どんなことが必要か」
- ・振り返りはシートに記入させた方がいい。（紹介や評価に使える）
- ・振り返りは生徒に発表させたい。そのためには時間短縮を上手に行う。
- ・自己評価，相互評価（リレー形式+何を頑張ったのか，理由や根拠を述べる習慣）
- ・自分の意見が取り上げられる＝自己有用感



(5) 公開授業（平成29年11月17日）

① 1年英語

身につけさせたい力 自分の考えなどを発信する力「話す力」10 / 10

単元名 Lesson 6 Junior High School in the U.S. (TOTAL ENGLISH 1 学校図書)

主体的な学習：学習の流れ・ゴールの目安の提示

何をどのような方法で行うのか，ゴールにいる自分達の姿がみえることを意識させ，主体的に学習に取り組ませる。

対話的な活動：穴あき音読の活用とペア学習



② 2年道徳

育みたい道徳的な判断力・心情

相手の立場になって考え，温かい気持ちで人と関わろうとする心情

主題名 相手の立場になって考える 《内容項目：思いやり B-(6)》

資料名 「センターピンはどこに…」前ザ・リッツ・カールトン日本支社長 高野 登

主体的な学習：学習課題の提示

「ウェイトレスの行動から，思いやりについて考えよう」

展開段階で資料の内容から早めに離れ，ねらいとする道徳的価値を自分自身のこととして見いださせるため

対話的な活動：付箋紙に自分の考えを書かせ，意見交換させる。



③ 3年学級活動

育みたい実践的な態度

自分の生活を振り返り，自分自身の長所を意欲的に見つけ出そうとする態度

題材名 「自分の長所を面接で話せるようにしよう」 1 / 2

《内容項目(3)-ウ 進路適正の吟味と進路情報の活用》

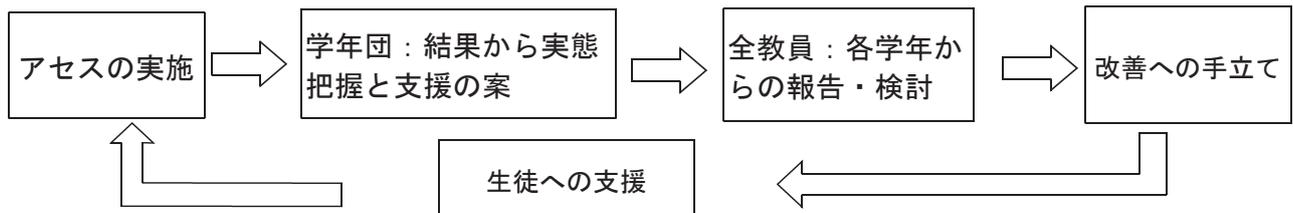
主体的な学習：生徒の興味・関心・意欲を引き出すような導入，  
学習課題の提示

対話的な活動：グループでの活動を通して，お互いの考えを伝え合い，頑張りを認め合うことで，自分のよさや努力に気付かせる。



## 2 アセスについて

全教員が関われるように，次のような流れでアセスの結果を分析し，どのような支援をするかを検討した。また，アセスは年3回実施し，その変容を確認することにした。



## 3 研究の検証

(1) アセスの結果から

・現3年生学級平均票

適応次元	28年度			29年度	
	1回目	2回目	3回目	1回目	2回目
生活満足感	56	53	53	58	63
教師サポート	72	72	68	68	72
友人サポート	63	61	63	66	72
向社会的スキル	69	63	65	69	72
非侵害的關係	67	65	70	71	72
学習的適応	59	55	58	60	62

・現2年生学級平均票

適応次元	28年度			29年度	
	1回目	2回目	3回目	1回目	2回目
生活満足感	47	40	43	45	48
教師サポート	49	43	47	54	53
友人サポート	50	46	47	52	51
向社会的スキル	47	47	47	52	49
非侵害的關係	55	54	54	57	56
学習的適応	47	44	43	45	47

・現1年生学級平均票

適応次元	28年度			29年度	
				1回目	2回目
生活満足感				45	44
教師サポート				50	49
友人サポート				38	39
向社会的スキル				45	42
非侵害的關係				49	54
学習的適応				49	49

2, 3年生の28年度と29年度の学級平均偏差値を比較すると、29年度の6因子の値が向上している。28年度からのお互いを認め合う活動や授業改善といった継続的な取り組みの成果が現れてきたと考えられる。1年生は、全体的に低い値を示しているが、特に「友人サポート」「向社会的スキル」「生活満足感」の値が低い。普段の生活の様子を見ていると、暴力的な言動が見られることと、お互いに卑下し合っていること、また、人間関係を作るスキルの未熟さが原因と考えられる。今後は、人間関係を築いていくスキルを身につけさせることと、お互いのよい面を見付ける活動や学級レクなどの活動を取り入れていき、3学期のアセスで変容を確認していきたい。

(2) 気になる生徒の変容

・現3年女子B 28年度

女子B	生活満足感	教師サポート	友人サポート	向社会的スキル	非侵害的關係	学習的適応
第1回	38	57	49	52	31	38
第2回	38	63	49	63	47	35
第3回	53	57	49	66	47	48

・現3年女子B 29年度

女子B	生活満足感	教師サポート	友人サポート	向社会的スキル	非侵害的關係	学習的適応
第1回	46	59	50	63	49	39
第2回	62	59	59	63	53	55

【28年度の支援】

女子Bは、友人関係で無視されたり、仲間に入れてもらえなかったりという経験や授業の内容がよく分からなかったりということが原因で「非侵害的關係」や「学習的適応」、「生活満足感」が低くなっているものと考えられる。

今後は、Bの頑張りを具体的に褒めていきたい。また、教育相談などを通して不安感の内容を把握することに努め、得た情報を全教員で共有しながら対応していきたい。

【29年度 1回目の支援】

学習に対して不安があるため生活満足感が低くなっていると考えられる。学年としては必要に応じて学習支援を行っていきたい。

IV 成果と課題

- ・アセスを使用することにより、普段の様子からは分からない生徒の一面を知るきっかけとなった。また、個々の生徒へのサポートや、学級集団として何が必要なのかなど、学担だけではなく学校全体で確認し、指導の方針について検討することができた。
- ・アセスの特徴である、家庭内の様子も把握できたため、子どもへの声かけ等について、参観日でアドバイスすることができた。
- ・大戸瀬中学校授業づくりのスタンダードに基づいた授業づくりができつつある。授業の改善の効果を確認するとともに、今後の改善点についても話し合っていきたい。
- ・生徒の生活へのサポートの内容やその手立てについては、具体的な方策がなかなか立てられなかった。生徒個々への対応の難しさを知ることとなった。

# 大鰐町立大鰐中学校

---

**生徒の思いやりを育み、居心地のいい学級をつくるための学習指導のあり方**

**～各教科における協同学習の実践を通して～**



## I 学校の概要

### 1 学校の概要

本校は、大鰐町に一つある町立中学校である。現在は少子化により各学年2学級（通常の学級6のほか特別支援学級が2）、全校生徒192人（1学年46人、2学年76人、3学年70人、男子98人、女子94人）で、中学校としては小規模校である。

平成28・29年度に青森県教育委員会から「思いやりを育む安心できる学校づくり」の実践研究事業の指定を受けたが、以下の生徒の実態から、当たり前のことを当たり前に行うことと努力を認めることで、普通の生徒の意識を高め、集団全体の向上を図ることに組織的に取り組んでいる。そして、自らを振り返り行動を正す自己指導能力の育成を図るとともに、学年や学級集団における望ましい人間関係の構築に努めていきたい。

#### (1) 学習面での生徒の実態

全体的に素直な生徒が多く、授業では一部の男子生徒を除けば与えられた課題に取り組もうとする。しかし、学力検査の結果から、基礎・基本の定着が図られていない生徒も少なくない判断ができる。また、継続的な家庭学習が難しい生徒も多く、全国学力・学習状況調査によると、28年度及び29年度3年生の家庭学習時間は、全国や県平均と比べて平日・休日ともにかなり少ない。その分ゲームやネットなどに使っている時間が多くなっている。そのため、授業を基盤として学力の向上を目指すとともに、家庭学習の習慣化も図る必要があると考える。

そこで、28年度の先進実践校視察で紹介された「協同学習」を取り入れ、全教員一丸となって、学習に向かう生徒の意識を高めていきたいと考える。また、家庭学習習慣の確立のため、28年度から家庭と協力して行ってきた、学習状況確認のための「ダブルチェック体制」も継続している。

#### (2) 生活面での生徒の実態

生活面では、明るく元気にあいさつをする生徒が多い。そして、精神的に幼く短慮な言動が目立つ男子がいるのに対して、女子は場面を意識したしっかりとした言動ができる生徒が多い。全体的には一部の多動傾向のある男子を除いて、比較的落ち着いた学校生活を送っている。運動会や文化祭など自分たちが主体となって楽しめる行事については、生徒会執行部や学級リーダーを中心にまとまって取り組む。しかし、学習面になると下位を集団の標準にしようとする傾向があり、みんな向上していこうとする意識は薄い。

事情のある家庭環境で育てられた生徒がいるとともに、人間関係を築くことが苦手な他者と関わることができず、配慮が足りない周囲の言動から悩みやトラブルを抱え、不適応行動を起こす生徒もいる。そこで、いじめや教育相談のアンケート調査だけでなく、「アセス」など生徒の学校適応感が捉えられる心理検査を活用し、学校不適応の早期発見と早期対応に努めている。

### 2 学校経営方針

#### (1) 教育目標

進んで学び、心豊かで自立できる鰐中生

- ・よく考え、進んで学習に励む生徒
- ・自らを律し、思いやりのある生徒
- ・体をきたえ、活力あふれる生徒

#### (2) 経営方針

目標をもって自ら学び、豊かな心でたくましく生きる、知・徳・体の調和のとれた生徒の育成を

目指す。

特に、過去の反省を踏まえ、学校の恒常的な安定のため、生徒指導上の課題解決に向けて、教育活動全体を通して豊かな心を育み、人と人との絆づくりと、みんなが輝ける居場所が見つけられる学校づくりに努めることで、「思いやりを育む安心できる学校」を目指し、それを基盤として、本校の最重点課題である「確かな学力の向上」に一丸となって取り組む。

そのために、創意工夫をこらし、熱意と協調の精神をもって、夢を育み、楽しさや喜び、達成感や感動をもたらす教育活動を推進する。

こうした教育活動推進の鍵を握るのは、生徒の教育をつかさどる教職員である。教職員個々の資質能力と、学校としての組織力の向上に努め、生徒の個性を生かし、能力の伸長を図りながら、生徒・保護者・地域から信頼される開かれた学校づくりに取り組む。

具体的には、教育にかかる環境や集団の雰囲気が生徒に影響することを重視するとともに、見守ることは大事だが状況に応じて生徒を指導することはもっと大切であると意識し、諸教育活動を通して、誰もが安心して学習に向かえる集団の育成と、生徒のやる気を引き出し、何事にも自主的に本気で取り組む生徒の育成を図る。

## II 1年目（28年度）の研究の概要

### 1 1年目（28年度）の重点的取組

#### (1) 校内体制の整備について

27年度までは、生徒及び生徒指導に関わる情報を職員朝会、主任会議、職員会議で交換し、いじめが認知された場合に「いじめ不登校対策委員会」を行ってきた。28年度は、

- ①毎朝の職員朝会の次第に「生徒及び生徒指導について」を設け、情報交換を密にした。
- ②隔週で行っている主任会議のメンバーに養護教諭を加え、主任会議後半の生徒についての話し合いを「いじめ不登校対策委員会」と位置づけ、定期開催にした。

#### (2) いじめの予防、早期発見・早期対応の観点から

- ①生徒の変化に早く気づくことができるよう、また、生徒がSOSを出せるよう「あじゅらノート（生活ノート）」の生活記録欄を活用した。
- ②年2回実施しているいじめアンケートを、定期教育相談や保護者面談の前に行い、その結果を相談や面談に役立てられるようにした。
- ③養護教諭を主任会議（いじめ不登校対策委員会）に加え、保健室で得た生徒情報を管理職と学年主任が共有できるようにした。
- ④スクールカウンセラーと簡単な連絡ファイルを交換することで、生徒指導主事や学年主任が利用している生徒の必要な情報を得られやすいようにした。

#### (3) 地域の人材の活用の観点から

- ①町教育研究会の小中連携事業の一環として、新入生の情報交換会を入学前に小学校で、入学後に中学校で行い、中1ギャップ解消のために必要な情報の交換に努めた。
- ②町生徒指導推進連絡協議会を年に5回行い、教育事務所や町教育委員会、警察や町健全育成協議会と生徒指導面について情報交換を行った。
- ③町民生児童委員との協議会を年に2回行い、家庭環境や経済状況が気になる生徒について情報交換を行った。
- ④PTA厚生委員と協力して、宵宮の巡回指導と交通安全のための街頭指導を、それぞれ年2回行った。

⑤町社会福祉協議会や町中央児童館、町ボランティア連絡協議会等が行っているボランティア活動が盛んで、有志生徒が参加した。28年度は学校として表彰された。

(4) 実態把握の観点から

①アセスを年2回（7月と12月）に実施するとともに、HyperQ-Uを6月に実施し、生徒の実態と変容の把握に努めた。（アセスの結果と考察は以下に示す）

(5) その他

①生徒指導上の課題について、スクールソーシャルワーカーから随時助言指導をいただいた。

## 2 1年目（28年度）の成果と課題

研究指定校として、28年度重点的に行ったのは「アセス」についての研修である。7月にアセスの使い方を、夏休みにアセスの結果の読み取り方を、外部講師を招いて全教員が研修したことで、生徒の実態を多様な視点で捉えることができるようになり、教員のスキルの向上につながった。

(1) 学年ごとのアセスの結果

以下の表に、学年ごとに6因子の2回の結果を示す。なお、変化の欄は、向上は上向き、下降は下向き、1ポイントにつき一つの矢印で示してある。また、50未満の数値には網掛けをしてある。

①アセス6因子の数値（平均が50）

学 年	1 年 生			2 年 生			3 年 生		
	7 月	12 月	変 化	7 月	12 月	変 化	7 月	12 月	変 化
生活満足感	54.4	53.4	↓	56.5	58.5	↑↑	54.0	53.5	
教師サポート	55.0	55.1		53.5	55.0	↑	52.5	53.5	↑
友人サポート	55.4	53.7	↓	56.0	58.0	↑↑	51.0	51.5	
向社会的スキル	54.7	51.3	↓↓↓	57.5	59.0	↑	52.0	51.5	
非侵害的關係	55.4	56.6	↑	55.0	57.0	↑↑	55.0	57.0	↑↑
学習的適応	52.7	47.3	↓↓↓↓	49.5	49.0		52.5	54.0	↑

②学習及び対人の不適応者数（不適応者とされる40未満の人数）

学 年	1 年 生		2 年 生		3 年 生		全 校	
生徒数（N）	76人	73人	70人	68人	68人	67人	214人	208人
因子\実施月	7月	12月	7月	12月	7月	12月	7月	12月
学習的不適応	8人	13人	13人	12人	3人	6人	24人	31人
対人的不適応	3人	4人	1人	2人	2人	2人	6人	8人

(2) アセスの結果から考察した成果と課題

①全学年とも非侵害的關係因子の数値が向上しており、いじめ防止の観点で考えれば、28年度の取組の方向性に間違いはなかったと考えられる。

②1・2年生は6因子の中で、特に学習的適応因子の数値が低い。

③1年生で数値の下降が目立ち、対人的適応因子では特に向社会的スキルの数値が下がっている。また、友人サポートの数値も少し下がっている。入学から1年経過する中で、友だちとの関係をうまくつぐれない、あるいはどのようにつぐればよいのか分からないと感じている生徒が増えたと思われる。さらに、学習的適応因子の数値は5ポイント以上下降しており、1年間で中学校の勉強に苦手意識をもつ生徒がかなり増えたことが分かる。

- ④クラス替えを行った2年生で、特に対人的適応因子の数値が向上しているが、学習的適応因子の数値は7月ですでに平均の50を切っており、12月にかけてさらに微減している。
- ⑤3年生は学習的適応因子の数値が12月に向上している。高校進学を意識し学習に真剣に取り組むようになったことが、影響しているのではないかと推察できる。

### Ⅲ 2年目（29年度）の研究の実際

#### 1 研究の概要

##### (1) 28年度からの経緯

28年度に2回行ったアセスの結果から、本校生徒の一番の課題は学習的適応にあることが分かった。この結果から、本校生徒の場合、学校生活に適応するためには、まず学習に対する適応感を高めることが肝要であると考えた。そこで、今年度は校内研と関連させて「協同学習」に取り組み、生徒の学習的適応を高めたいと考えている。協同学習を行う理由は、28年11月に視察した岡山県総社市の先進実践校が取り組んでいるアプローチ方法の中で、最も本校の学習指導改善に取り入れやすいと思ったからである。

また、1年生で対人的適応因子、特に向社会的スキルの数値が下がっていることも分かった。そのことから、友だちとの人間関係をうまく構築するスキルを高めるための、ソーシャルスキルトレーニングのような活動を取り入れる必要性を感じた。そこで、本事業の趣旨を生かすとともに、アセスの開発者が編著作した既成の「いじめ防止プログラム」があることから、学級活動の時間に全学級でそのプログラムに取り組みたいと考えている。

##### (2) 研究の全体計画

月	生徒の活動等	生徒指導部	学習指導部	特活指導部
4	○あじやらノートに生活記録⇒年間継続 ○新入生を迎える会 ○SCの配置(週1回)	○アセスの実施(1回目) ・アセスの入力(学年で、以下同じ)		
5	○1年つつじ植樹 ○1、2年家庭訪問 ○3年修学旅行 ○いじめアンケート ○全校教育相談(1回目) ○1年命の健康教室	○アセスの分析 ・不適応生徒の把握 ・学年で具体的対策を検討 ・全教員で共通理解、対応	○協同学習に関する勉強会の開催(外部講師) ・協同学習の本校定義とルールを決める ○各教科で協同学習の実施 ⇒年間継続	○いじめ防止プログラム実施計画作成、提示
6	○大運動会 ○2年思春期教室			○学級で授業実施(必要に応じて修正する) ※基本6時間で
7	○社会を明るくする運動へ全校参加 ○保護者(三者)面談	○アセスの実施(2回目) ・アセスの入力	○計画訪問(協同学習と学活を実施⇒協議会)	○計画訪問で授業実施 ⇒断続的に6回
8	○いじめアンケート	○アセスの分析		

	○全学年の遠足	・対策検討、対応 ○アセスの事例研究会議（外部講師）		
9	○3年薬物乱用防止教室		○要請訪問 （数学で協同学習を実施⇒協議会）	
10	○1年ふるさと体験学習〔キャリア教育〕 ○2年職場体験学習〔キャリア教育〕 ○いじめアンケート			
11	○全校教育相談（2回目）		○研究発表会で授業を公開⇒協議会	○研究発表会で授業を公開⇒協議会
12	※保護者アンケート ○全校三者面談	○アセスの実施（3回目） ・アセスの入力	○70周年で協同学習の公開授業	○70周年でいじめ防止プログラムの公開授業
1	○いじめアンケート	○アセスの分析 ・対策検討、対応 ・研究紀要の原稿作成	○協同学習のまとめ ・研究紀要の原稿作成	○いじめ防止プログラム実施のまとめ ・研究紀要の原稿作成
2			○研究紀要編集	

## 2 2年目（29年度）の重点的取組

### （1）校内体制の整備について

28年度の反省から、29年度は本事業で行う取組を分掌ごとに明確に分担した。上の表のように、まず生徒指導部が「アセス」の検査について担当し、学習指導部が「協同学習」を、特活指導部が「いじめ防止プログラム」を担当することにした。また、校務分掌組織はそのままであるが、活性化することを期待して各分掌主任は学級担任以外とした。結果、ほとんどの主任が28年度とは代わることになった。

### （2）いじめの予防、早期発見・早期対応の観点から

- ①「あじゃらノート（生活ノート）」生活記録欄の活用、保護者へのアンケート、いじめアンケートや定期教育相談の実施について昨年度と同じように行う。また、いじめアンケートは長期休業明けにも行う。
- ②養護教諭やスクールカウンセラーから生徒情報を得ることを今年度も継続する。
- ③「いじめ不登校対策委員会」の資料となる「いじめ相談確認シート」の様式を定め、本校教員であればいつでもそれを活用できるように、校内の所定のフォルダに入れ生徒情報を共有する。

### （3）地域の人材の活用の観点から

- ①小中連携事業による大鰐小学校との情報交換、生徒指導推進協議会での情報交換、民生児童委員や学校評議員からの情報収集を今年度も継続する。
- ②宵宮の巡回指導と交通安全のための街頭指導を、今年度もPTAと協力して継続する。

③社会福祉協議会や児童館などが募集するボランティア活動への参加を呼びかける。

(4) 実態把握の観点から

①年3回アセスを実施し、学級集団への適応感を把握するとともに、個々の変容の把握にも努める。また、NRTや全国学力・学習状況調査の結果からも生徒の学力等の実態把握に努める。

### 3 2年目(29年度)の校内研修計画(研究の計画の学習指導部の部分)

(1) 研究主題

「生徒の思いやりを育み、居心地のいい学級をつくるための学習指導のあり方」  
～各教科における協同学習の実践を通して～

(2) 主題設定の理由

昨年度は、本校が3年間取り組んできた「書く」活動を中心とした表現力の育成の集大成として、ワークシートの改善に取り組んだ。また、前年度に引き続き「教え合い」「グループ活動」も積極的に授業に取り入れ、粘り強く学習に取り組む生徒の育成のために努力してきた。その結果、県学力状況調査で記述式問題の未記入生徒の減少という成果を得ることができた。しかし、グループ学習を行っても協力しない生徒がいたり、自分の作業が終わっても仲間を助けなかったりと、仲間への配慮にやや欠ける場面が見られることもあった。また、みんなの前で意見を言うことをためらい、交流が深まらない場面も見受けられた。生徒同士が意見を交流し合って、さらに思考を深めるためには、安心して意見を言い合える学級の雰囲気づくりが欠かせない。

本校は平成28・29年度の2年間、青森県教育委員会から「思いやりを育む安心できる学校づくり」の実践研究校に指定されている。本校生徒の実態を踏まえ、また実践研究校に指定されたことを受け、生徒の思いやりを育み、居心地のよい学級をつくるために授業を通してできることを追究したいと考えた。そこで、今年度は研究主題を上記のように設定し、各教科で協同学習を取り入れることにより、生徒の思いやりを育み、居心地のよい学級づくりの一助にしたいと考える。

また、協同学習は、本校の長年の課題となっている学力向上にもつながると考えている。今年度は協同学習を行う際のルールを徹底させることにより、学習の雰囲気を整え、学級全体が学習に向かおうとする雰囲気をつくっていききたい。

なお、本校における協同学習とは、生徒による「学び合い」の場面があり、できれば学び合ったことを表現する場面がある学習と共通理解して取り組んでいる。

(3) 研究の目標

各教科において、生徒の思いやりを育み、居心地のいい学級をつくるために、協同学習が有効であることを明らかにする。

(4) 研究方法

①研究内容

- ア 研究主題を基にした各教科の研究テーマや研究仮説を検討し、実践する。
- イ 各教科で、協同学習を取り入れる。

②具体的な取り組み

- ア 全教員が年に一度は指導案を書き、教科の指導法の工夫をする。
- イ 公開授業日を設定し、お互いの授業を参観し合い、感想や意見を交流することで次の授業に生かす。

- ウ 全教職員と家庭が連携してチェック体制を整え、家庭学習の質を高める。
- エ 年2回講師を招いて勉強会を実施し、指導力向上に努める。
- オ 大鰐中学校としての協同学習のルールを決めて、授業改善に取り組む。
- カ 生徒指導部と連携して、年3回のアセスを実施し、学習指導に生かす。
- キ 特別活動指導部と連携して、年間6時間の「いじめ防止対策プログラム」を全学級で実施する。

#### IV 2年間の成果と課題

##### 1 全体的な傾向

2年間の実践研究のまとめとして、アセスの結果から分析した、学年を基本とした全校的な傾向とその考察を示す。なお、アセスの個人特性票を用いた生徒個人の事例については、個人が特定される恐れがあるため、研究発表会において口頭で示すに止め、この報告書には詳細を掲載していない。

##### (1) 学年ごとのアセスの結果

今年度を実施した3回（4月・7月・12月）のアセスの結果を学年ごとに示した表が①である。また、現2・3年生について28年度からの過去5回の数値を示し、その変化が分かるようにした表が②である。なお、推移を分かりやすくするため2ポイント以上の向上はゴシック体に、2ポイント以上の下降は斜字にしてある。また、平均とされる50未満の数値には網掛けをしてある。

##### ①29年度のアセス6因子の数値

学 年	1 年生			2 年生			3 年生		
	4 月	7 月	12 月	4 月	7 月	12 月	4 月	7 月	12 月
生活満足感	58.5	<b>55.5</b>	<b>58.0</b>	56.5	56.0	<b>54.0</b>	60.0	59.5	<b>57.0</b>
教師サポート	55.5	57.0	58.5	55.4	55.5	57.0	59.6	59.6	60.5
友人サポート	59.5	<b>55.5</b>	<b>57.5</b>	54.4	56.0	55.0	58.6	57.5	57.5
向社会的スキル	53.0	53.0	53.5	53.9	54.0	53.0	59.0	60.0	59.5
非侵害的關係	64.0	<b>62.0</b>	63.0	56.5	56.5	58.0	58.5	<b>61.6</b>	61.0
学習的適応	56.5	<b>53.0</b>	53.0	54.0	52.5	52.5	52.5	51.0	51.0

##### ②現2・3年生のアセス6因子の数値の推移（※2年生進級時にクラス替え）

学 年	28年度1年生		29年度2年生			28年度2年生		29年度3年生		
	7 月	12 月	4 月	7 月	12 月	7 月	12 月	4 月	7 月	12 月
生活満足感	54.4	53.4	<b>56.5</b>	56.0	<b>54.0</b>	56.5	<b>58.5</b>	60.0	59.5	<b>57.0</b>
教師サポート	55.0	55.1	55.4	55.5	57.0	53.5	55.0	<b>59.6</b>	59.6	60.5
友人サポート	55.4	53.7	54.4	56.0	55.0	56.0	<b>58.0</b>	58.6	57.5	57.5
向社会的スキル	54.7	<b>51.3</b>	<b>53.9</b>	54.0	53.0	57.5	59.0	59.0	60.0	59.5
非侵害的關係	55.4	56.6	56.5	56.5	58.0	55.0	<b>57.0</b>	58.5	<b>61.6</b>	61.0
学習的適応	52.7	<b>47.3</b>	<b>54.0</b>	52.5	52.5	49.5	49.0	<b>52.5</b>	51.0	51.0

##### (2) アセスの結果から考察した成果と課題

- ①総じて進級した4月に数値が向上している。進級に伴い意欲が高まることによると思われる。特に29年度2年生は1年生のうちに下降した因子が再向上する傾向にあった。これはクラス替えに伴う新しい所属集団とそこでの新しい人間関係への期待からと思われる。

- ②2年間とも1年生は、1回目のアセスから2回目のアセスにかけて、全体的な傾向として数値の下降が見られた。本校においても中1ギャップが指摘され得る結果となった。予想や期待をしていた中学校生活と現実との違いが影響していると思われる。なお、29年度1年生の12月のアセスでは、学習的適応因子を除き数値の回復が見られる。
- ③28年度は3年生を除いて、どの学年も6因子の中で学習的適応の数値が低い傾向にあった。また、学習的適応因子は年度当初にいったん高くなつては、年度内で徐々に下降してくる傾向にあり、特に1年生で顕著であった。進学や進級に伴う学習への意欲や期待と、テスト結果などで次第に現実を認知していくことの影響と思われる。29年度はこの対策として「協同学習」に取り組んだが、どの学年も4月から7月にかけては下降し、7月から12月にかけては横ばいであった。数値の推移が微妙であることから、本校の「協同学習」が、本校生徒の学習的適応感を高めることに、とても有効であったと結論付けるには無理があると思われる。
- ④非侵害的關係因子の数値は、1年生でいったん下降したが12月に回復、2年生では12月に向上、3年生では7月に向上し、いずれも高い値である。各学年とも現在の定義によるいじめを認知することもあるが、いじめをしてもよいという雰囲気は蔓延していないと思われる。これには、29年7月から全学級で取り組んだ「いじめ防止プログラム」の効果もあると考えられる。ただし、このプログラムに取り組んだ理由には、いじめの未然防止だけでなく、28年度1年生の対人的適応因子、特に向社会的スキルの数値が下降していたことから、友だちとの人間関係をうまく構築するためのソーシャルスキルトレーニングとしての意味もあった。29年度12月までの友人サポート因子・向社会的スキル因子の数値の推移から考えると、友だちとの人間関係をうまく構築するためなら、それに特化したプログラムの方が効果的であったと考えられる。
- ⑤どの学年も、教師サポート因子の数値が少しずつ向上している。この実践研究を行ったことにより、教師が常に思いやりを育む安心できる学校づくりを意識して、生徒と接し指導してきたことによると考えられる。
- ⑥29年度12月のアセスでは、2年生と3年生で生活満足感因子の数値が下降したが、特に3年生は他の因子の目立った下降や変化がないため、原因は学校生活ではないと考えられる。

## 2 生徒個人の事例研究例（現3年生A男の場合）

※個人の事例については、個人情報であるため、実践研究発表会において口頭で報告した。

- (1) A男の個人特性
  - ①A男の実態と環境
  - ②アセス6因子の数値の推移
- (2) A男への具体的支援策
- (3) A男の最近の様子（変容）

## V 参考文献

- ・栗原慎二・井上弥他（2017）『アセスの使い方・活かし方』ほんの森出版
- ・栗原慎二他（2013）『いじめ防止6時間プログラムいじめ加害者を出さない指導』ほんの森出版

# 東北町立上北中学校

---

## 思いやりを育む安心できる 学校づくり

～生徒一人一人が輝ける居場所・絆づくり／安心して生活できる学校生活の推進／教員の指導力向上～



## I 学校の概要

### 1 学校の概要

小川原湖と豊かな自然に育まれた東北町にある本校は、生徒数233人・8学級、今年で創立70周年を迎える歴史ある学校である。本校教育活動の特色のひとつとして、総合的な学習の時間を用いて上北秋まつりに学校行事として参加していることが挙げられる。学年毎に山車を制作し、笛・小太鼓・大太鼓の囃子で町内を練り歩き、まつりを盛り上げる。山車の装飾や囃子の練習を生徒主体で行うため、大いに力が入る行事である。また、近年では台湾台北市立天母国民中学校との異文化交流を行い、生徒が海外の文化に触れる機会を設定している。一方、文化祭・運動会でのPTAの協力や、地区懇談会・環境整備作業などPTA行事へも多くの保護者が参加するなど、保護者・地域と共に生徒の健全育成に努めている。

### 2 学校経営方針

#### 教育目標

- ・ねばり強く学ぶ生徒
- ・よりよく行動する生徒
- ・進んで体を鍛える生徒

#### 努力目標

- ・めあてをもって学習をする
- ・けじめのある生活をする
- ・健康な心と体づくりをする

学校は、「生きる力」を育む場でなければならない。

一人一人の生徒が将来に向かう夢を持ち、その夢の実現に必要な力を育むことが学校の使命である。そのため、一人一人の輝かしい未来を願い、一人一人が誇りを持てるような教育の実現に努める。

そして、生徒一人一人の生き方の指針となる「校訓～勤勉・愛校・一心～」に根差した教育活動を展開していくことを目指す。

## II 研究の概要

### 1 研究主題

教育活動全体を通じて生徒の豊かな心を育み、生徒一人一人が輝ける居場所づくりと生徒間の絆づくりを図り、生徒が安心して生活できる学校づくりと教員の指導力向上を目指していく。

### 2 主題設定の理由

近年、我々の生活環境や経済基盤が変化し、生徒の生活にも多様な変化が見られ、学校ではいじめをはじめとする、暴力行為、不登校等の生徒指導上の課題解決に向けての取組の強化が求められている。本校でも人間関係の希薄さや、インターネット・タブレット端末の普及による生活体験の不足等成長の未熟さに起因すると思われる問題行動も起こっている。これらの問題の解決と未然防止のためには、全職員が生徒一人一人に目を向け必要に応じた支援を講じるとともに、生徒の小さな変化にも気付けるような教員の技能と知識の習得が不可欠である。本研究では、生徒と教師・生徒と生徒の円滑な関わりを推進し、生徒の「思いやり」や「感謝の心」を育て、自信をもって行動できる力を醸成していくことで、「生徒の学校生活の質の向上」や、いじめや問題行動等「生徒指導上の課題解消」を目指せると考え、本研究主題を設定した。

### 3 研究目標

本研究では「生徒の学校生活の質の向上」と「生徒指導上の課題解決」に向け、生徒の豊かな人間性・社会性を育成するために以下の3つの目標を設定した。

- ・ 生徒一人一人が輝ける居場所・絆づくり
- ・ 安心して生活できる学校生活の推進
- ・ 教員の指導力の向上

これらの達成のために、学校環境適応感尺度を図ることができる「アセス」を活用して、生徒の生活への適応状況や心理状態を把握しながら研究を進めた。

その過程で生徒の実態に合った学年・学級経営を行いながら「思いやり」「絆づくり」「居場所づくり」をキーワードとして、効果的な取組を推進していくことにした。また保護者・地域・関係諸機関との連携のもと、生徒会活動・学級活動・道徳を充実させ3つの目標の達成を目指した。図1は、研究の基本的な考え方として、以上の内容をまとめたものである。

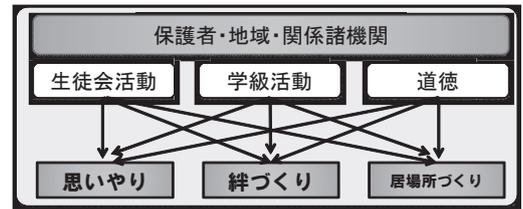


図1 研究の基本的な考え方

### 4 具体的取組の概要

#### (1) 各委員会での取組の継続・強化

- ア 挨拶運動【委員会・部活動とのタイアップ】
- イ 運動会後の感謝メッセージ【学年評議委員会】
- ウ 自分が言われて嬉しかった言葉、救われた言葉【保健委員会】
- エ 中体連前の部活動毎の目標設定【学年評議委員会】
- オ 中体連前の応援練習【体育委員会】
- カ 上北秋まつりの囃子練習【体育委員会・学年評議委員会・運動会ブロック】

#### (2) ボランティア活動の充実

- ア 石拾いボランティア
- イ 床磨きボランティア
- ウ 雪かきボランティア
- エ 清掃ボランティア
- オ 結露取りボランティア
- カ 自転車小屋清掃ボランティア

#### (3) Good Behavior チケットの運用

- ア Good Behavior チケットの形式の作成と提案
- イ Good Behavior チケットのねらい
- ウ Good Behavior チケットの保管と保護者への配布
- エ Good Behavior チケットをもらった生徒の気持ち

#### (4) 特別活動の推進及び校内研修の充実

- ア 上中三本柱の検討・見直し
- イ 教員からの挨拶の工夫
- ウ スキル教育の学年への提案（年8回を目標）
- エ 行事の目標設定
  - ・ 主体的な取り組みに向けての話合い、目標作り

- ・ 教え合い（ピアサポート）を積極的に行うための目標作り（P D C A）
- ・ 事後の反省用紙の工夫及び反省の共有

**(5) 校内研修・授業研究及び各種研修会の充実**

- ア アセスについて【校内研修】
- イ 生徒の心理や関わり方・スキル教育について【校内研修】
- ウ ゲートキーパー養成講座【校内研修】
- エ 学級活動「望ましい人間関係の確立」【授業研究】
- オ 生徒の内面・心理理解に向けて【研修会】

**5 重点的取組内容**

**(1) 校内体制の整備について**

- ア 校内分掌組織に「心の教育」を位置づけ、ハートフルリーダーを中心として心の教育を推進する。
- イ 生徒指導に関する「きずな会議」にアセスを活用し取組の共通理解を図る。（5・11月）
- ウ 人権教室を教育課程に位置づけ、担当者を中心に計画的に推進していく。（7月）
- エ 学年会議，生徒指導部会議，主任会議で，生徒の情報交換・共通理解を徹底する。（毎週）

**(2) いじめの予防，早期発見・早期対応の観点から**

- ア 定期教育相談の実施。（6・11月）
- イ 教育相談員・スクールカウンセラーの年間を通じた活用。
- ウ 日常的な生徒の観察，保健室の有効的な活用。

**(3) 地域の人材の活用の観点から**

- ア 保護者との信頼関係の構築（円滑な連携，迅速かつ誠実な対応）
- イ 学校評議員，P T A理事，民生委員からの情報収集。

**(4) 実態把握の観点から**

- ア 年3回のアセス実施，分析。（5・9・1月）
- イ 生徒の日記等により，個々の生徒の内面の把握に努める。
- ウ 学年主任，学級担任，教科担任との情報交換を密にする。

**(5) その他**

- ア 生徒会執行部と各委員会のつながりを強化し，生徒会活動の活性化を図る。
- イ 道徳の授業等を通し，思いやりの心を育む。
- ウ 学区小学校との情報交換を密にし，連携した取組を推進する。
- エ 上北秋まつりへの全校参加を通し，地域とのつながりを深める。（8月）

**Ⅲ 研究の実際（Ⅱ 研究の概要 4 具体的取組の概要より）**

**(1) 各委員会での取組の継続・強化について**

- ア 挨拶運動（部活動ともタイアップした活動）  
全学年の学年評議委員と生活委員が中心となり，朝の挨拶運動を行った。
- イ 運動会後の感謝メッセージ  
上級生と下級生で感謝のメッセージを贈り合い，相互の内面のつながりの構築を目指した。
- ウ 自分が言われて嬉しかった言葉，救われた言葉

図2・図3は保健委員会が行ったキャンペーンの掲示物である。どのような言葉が自分にとって嬉しかったかについてアンケートを取り、部活動毎に掲示した。図3のように「がんばろうぜ・1人じゃないよ」などというような前向きな言葉が多く見られた。その後、図4のように保健だよりに掲載し、生徒のプラスの意識や言動を全校や保護者に広めた。生徒の言葉から教わることも多く、子どもたちが失敗する恐怖心から解放され、のびのびとチャレンジできるような言葉の大切さを改めて意識させられるものであった。

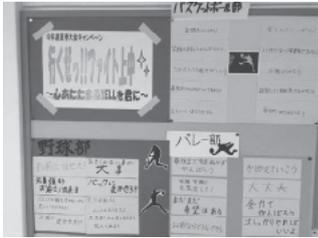


図2 保健委員会の取組

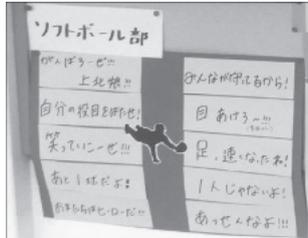


図3 保健委員会の取組

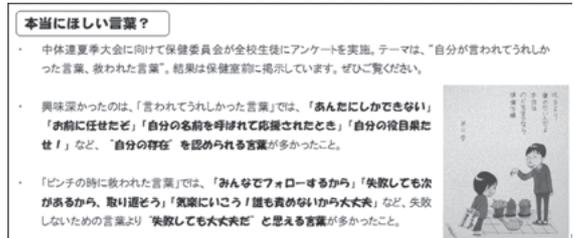


図4 自分が言われて嬉しかった言葉、救われた言葉【保健だより】

エ 中体連前の部活動毎の目標設定

図5は中体連前の部活動毎の目標であり、学年学活で意気込みや目標を掲示物にしている。図6のように生徒たちが思いを共有するなど、生徒をつなぐ役割も果たしている。

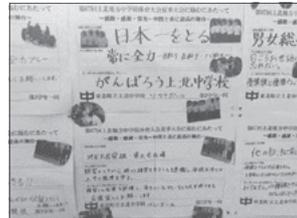


図5 目標設定



図6 生徒の様子

オ 中体連前の応援練習

毎年、中体連夏季大会前に全校応援の練習を行っている。大会3日目に、野球部とバスケットボール部が勝ち残ることを想定しての取組である。体育委員会が主導し、先の2つの部活動の部員や文化部の生徒も前に行き。担当した生徒の「できた」という成功体験が、その後の大きな力となっている。実際にバスケットボール部の試合形式の応援練習も見どころの1つである。また、上級生が下級生の学年朝会で応援の指導をする際にもピアサポートが行われるなど、活発な教え合い活動が特徴である。活動中、後輩たちは、先輩からの指導に真剣に話を傾けていた。平成28年度は野球部、29年度はバスケットボール部が3日目に勝ち進み、全校応援で練習の成果を発揮するとともに、貴重な時間を共有できた。

カ 上北秋まつりの囃子練習

本校は東北町の上北秋まつりに全校体制で参加し、生徒が作った山車で町内を練り歩く。秋まつりオリエンテーションでは、教師主導ではなく3学年評議委員が司会・進行を行う。またブロックでの練習では、先輩からの囃子の指導や、目標・反省の提示があるなどピアサポートの充実が図られる。先輩がリーダーシップを示し、後輩へとつなぐ要の活動となっている。

(2) ボランティア活動の充実について

ボランティア活動は、これまでの活動の「精選と充実」を意識して生徒に企画・運営をさせた。活動を行う際は、図7の様にミーティングでPDCAサイクルを意識させ、計画、評価や反省などを意識させ活動させるようにした。ボランティア後には、生徒集会や放送などで活動報告をさせ取組の周知を行っている。以前は執行部から依頼されて行っていたボランティアが、ここ数年で委員会が独自に活動を企画・運営していく流れができたことは、大きな成果である。そのため、自然に活動ができるような雰囲気作りを今後も醸成していくとともに、引き続き「ボランティア活動の習慣化」を図っていく。



図7 活動前のミーティング

(3) Good Behavior チケットの運用について

以下のア～ウの3本柱をもとに、平成29年1月下旬からこのチケットを活用し始めた。

ア Good Behavior チケットの形式の作成と提案  
Behaviorというのは「態度や振る舞い」という意味であり、良い行いをした生徒に対して図8のようなチケットを配ることにした。



図8 Good Behavior チケット

この取組は、岡山県総社市の先進校での取組を、本校の使用用途や目的に合わせて様式を変え実施したものである。図8は1年生の女子生徒に向けたチケットであり、3学期の始業式の朝、カーテンを学級に取り付ける際の行動についてである。コメントには「始業式の朝、誰よりも素早く動き、カーテンの取り付けに協力してくれました。ありがとうございます。」とある。この様に生徒たちの頑張りを「教員」が評価し、認める場面を増やすために活用しようと考えた。

イ Good Behavior チケットのねらい

ねらいは以下の3つであり、図9に簡略化して示す。

- ・ 教員が、生徒の正しい行動に対する評価をし、思いやりの大切さについて気付かせる。
- ・ 自分の行動が、人の役に立っているという思いを引き出し、自己有用感や自己肯定感の向上を目指す。
- ・ 生徒との関わりの材料とし、教師と生徒の良好な人間関係の構築・家庭との連携を目指す。

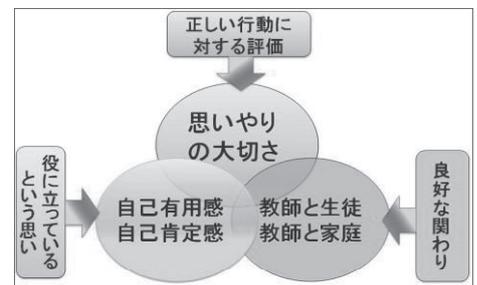


図9 Good Behavior チケットの目的

ウ Good Behavior チケットの保管と保護者への配布

図10は保管用ノート、図11はノートへの貼り付け方である。また、図12は職員室の様子であり職員全員がチケットの様子を把握しやすいようにしている。

保護者へは、チケットのコピーが生徒を通して渡るようにし、家庭への周知を図った。このチケットの渡し方については、現段階では表1のようなレベルアップ方式を考えている。

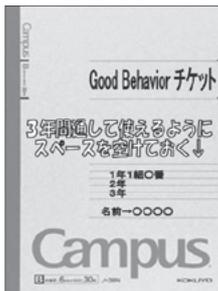


図10 保管用ノート



図11 ノートへの保管

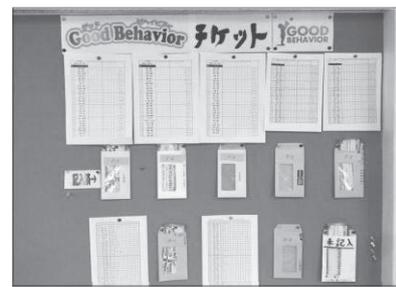


図12 職員室の掲示

表1 Good Behavior チケットの渡し方（レベルアップ方式）

第1段階	小さな事でもチケットを渡す。各教員の主観（平成29年1月～）
第2段階	「思いやりのある行動」が見られた際に渡す（検討中）

エ Good Behavior チケットをもらった生徒の気持ち

生徒には次のような変化が見られた。帰りの会でチケットを配布している際に、女子生徒Aが「私そんなのいらないし。」と言っていたことがあった。しかし、別の機会にその生徒がチケットをもらった際には「やったー。」と喜びの声を上げる場面があった。また、昼休みにボランティアの仕事をしている学級では、女子生徒Bから「先生！Good Behavior チケット私に

もください。」という声上がり、続いて男子生徒Aからも「僕も頑張ってますよ。」とチケットを望む声が上がった。生徒たちは、我々が考える以上に「認められたい」と考えており、そのような生徒の「思いの発信の場面」に触れることが度々あった。図13・14のような、チケットをもらった際の生徒の感想からも、その思いを感じることができる。

図13 生徒の感想①（3年男子生徒）

図14 生徒の感想②（2年女子生徒）

以下はGood Behavior チケット実施にあたって考えられた課題とその対策についてである。

- ・ 全校生徒への周知は、生徒集会や学年朝会を用いて生徒への周知を行った。
- ・ 生徒がチケットをもらったかという把握は、名列表にチェックを入れ確認した。
- ・ 生徒に渡す頻度は、学級担任は半年に1回以上は自分の学級の全生徒に渡す。学級担任以外の教員にも書いてもらうことで、教員全体で生徒一人一人を見取れるようにした。
- ・ 保護者へは先述通り、チケットのコピーが渡るようにし家庭との連携を図った。

#### (4) 特別活動の推進及び校内研修の充実について

##### ア 上中三本柱の検討・見直し

上中三本柱とは、教育目標に則して、生徒に意識してほしいことをまとめたものである。生徒会執行部が学校全体の話し合い活動を企画し、再編を進めた。

##### イ 教員からの挨拶の工夫

教員が生徒に挨拶をする際は、図15のように「〇〇君／〇〇さん、おはよう」という挨拶を心掛けてもらい、生徒の自己肯定感の向上を目指した。自己肯定感の向上のため

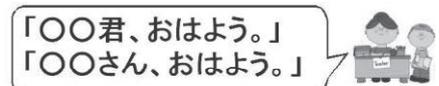


図15 教員からの挨拶の工夫

には「存在承認をすること」が必要である。つまり、名前を呼んで挨拶をし、生徒の存在を承認することが「今ここにいてもいいんだ」という生徒の思いにつながるようにした。

##### ウ スキル教育の学年への提案（年8回を目標）

本研究でのスキル教育とは、GWT（グループワークトレーニング）／SGE（構成的グループエンカウンター）／SST（ソーシャルスキルトレーニング）／対人関係づくりゲーム／アサーション等のことを示す。特別活動の担当者や、生徒指導部からスキル教育を提案し、学級活動などで指導ができるようにしてきた。

##### エ 行事の目標設定

- ・ 主体的な取り組みに向けての話し合い・目標作り
- ・ 教え合い（ピアサポート）を積極的に行うための目標作り（PDCAのPの重視）
- ・ 事後の反省用紙の工夫及び反省の共有

#### (5) 校内研修・授業研究及び研修会の充実について

##### ア アセスについて 平成28年8月8日（月）

- ・ 青森県総合学校教育センター指導主事 柴谷崇之氏を要請し、アセスについての理解及び各学級で実施したアセスを用いての演習を行った。

##### イ 生徒の心理や関わり・スキル教育について 平成29年1月12日（木）

- ・ 生徒の心理理解，学級活動で取り上げたいスキル教育についての研修  
ウ ゲートキーパー養成講座 平成29年4月25日（火）
- ・ 東北町保健衛生課の保健師を招いての，生徒の変化の気付き方や関わり方についての研修  
エ 学級活動「望ましい人間関係の確立」 平成28年11月7日（月）  
題材名「友達の良さを見つけられる人になろう」（2）ーオ 望ましい人間関係の確立  
オ 生徒の内面・心理理解に向けて 平成29年7月3日（月）
- ・ 青森県教育カウンセラー協会理事 佐々木順子氏を要請し，思春期の子どもの心の発達や特徴，子どもが発するSOS のサインと，SOS を受け取った後の対応について講演を行った。

#### IV 成果と課題

##### 1 アセスの分析から見た成果と課題（成果は○で，課題は▲で示す）

- 図16から図17，図18から図19の様に，同一学年の生徒のアセスの数値が向上した。
- 個々の教員のアセス分析力が向上し，教師集団の力の向上につながった。
- 生徒と面談を行うきっかけとなった。
- アセスの変容分析のシステム構築（実施後の結果印刷・学年での分析依頼・データ蓄積）
- 徐々に要支援領域（学校環境適応感の数値が40未満及び30未満）の人数の減少が見られた。
- 平成29年度に行った2つの取組（相談ボックス・教育相談員と全1年生との早期面談）が，新入学生の要支援領域の人数減少という結果につながった。
- アセスの数値が上昇する生徒が多くおり，数値と生徒の様子には相関関係が見られた。
- アセスの結果から職員全体で気になる生徒についての共通理解を深め，生徒と関わった。
- アセスの数値が40未満の生徒が減少した一方，数値が30未満の生徒の増加も見られたことがあった。この増加は，同一生徒が5つの学校適応感で30未満となり，人数が5人として計上され起こったものである。その生徒は，部活動や家庭での悩みを抱えるなど気持ちが不安定であり教師側がそれを把握していた際の結果でもあった。つまり，アセスの数値も重要であるが，我々教員が「その生徒が置かれている状況を把握し，指導しているかどうか」であると考えerきっかけとなった。
- ▲アセスの数値の要支援領域が30未満の生徒への対応策
- ▲家庭環境が原因となり，アセスの数値の低下につながっている可能性がある生徒の支援
- ▲学習的適応の向上に向けて

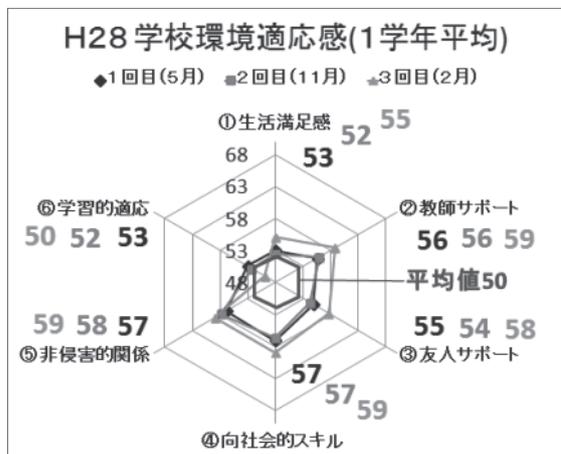


図16 H28学校環境適応感（1学年平均）

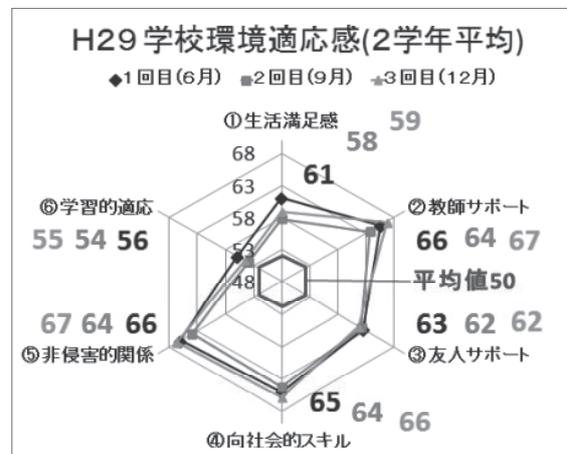


図17 H29学校環境適応感（2学年平均）

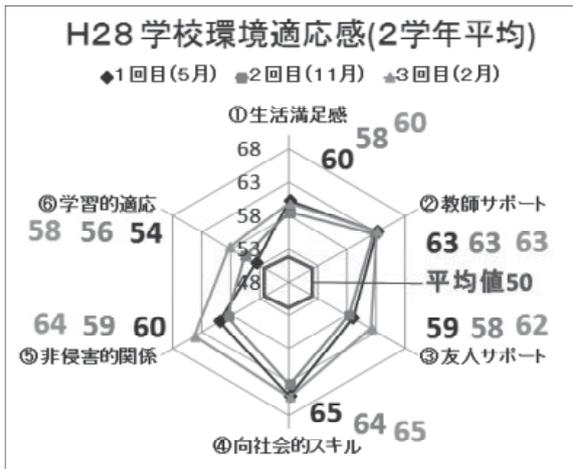


図18 H28学校環境適応感（2学年平均）

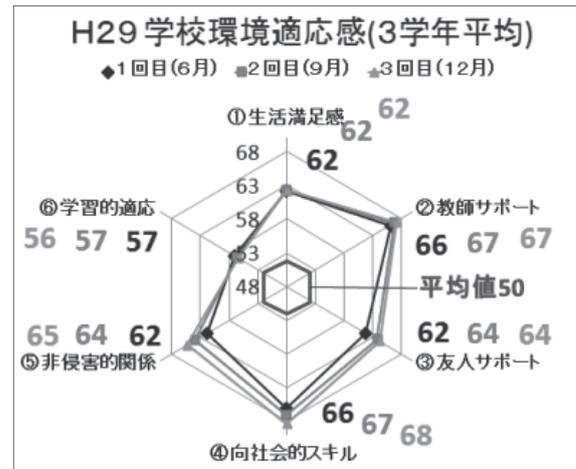


図19 H29学校環境適応感（3学年平均）

## 2 本研究を通しての成果と課題（成果は○で、課題は▲で示す）

- ボランティア活動，委員会活動の取組の活性化
- ピアサポートでの同学年及び，異年齢集団の中でのつながりの強化
- 各教科での教え合いの姿勢の向上
- 全教員が生徒一人一人に関わろうとする意識・姿勢の向上
- ▲スキル教育のデータの蓄積
- ▲教員の力の維持（転勤などによるもの）
- ▲小学校から中学校へつなげる指導
- ▲家庭や関係機関との一層の連携
- ▲教え合いに参加しやすい生徒の把握

## 3 本研究を振り返って

2年間の研究の中で大きな変容を感じるのは、目標(3) 教員の指導力の向上である。教師の意識の変化が、学校内の取組の強化や生徒との良好な人間関係づくりにつながった。それが結果として生徒に寄り添いながら心に働きかける指導や、学級活動や道徳を有効に活用できるような力の向上につながったと考える。

「生徒一人一人が輝ける居場所・絆づくり」「安心して生活できる学校生活の推進」「教員の指導力の向上」という3つの目標のもと行ってきた本研究での取組は、アセスの数値データから見ると、「学校生活の質の向上」「生徒指導上の課題解決」に有効であったと考える。

今後は、本研究で培った知識や技術をもとにした取組を継続し、子どもたちの表情や学校生活、家庭環境を総合して考えながら生徒たちと関わることで、生徒が安心して生活できる学校づくりを目指していく。

# 東通村立東通中学校

---

## アセスメントツールを活用 した組織的な支援のあり方 についての研究

～教育活動全体を通じた思いやりの育  
成と居場所づくり、人間関係づくり  
を通して～



## I 学校の概要

### 1 学校の概要

本校は20年度、東通村内にある北部中学校、小田野沢中学校、南部中学校の三校が統合して創立された村内唯一の中学校である。よって、学区は点在する29集落すべてを網羅し、約300km<sup>2</sup>に及んでいる。

各集落は農山村と漁村とに大別されるが、保護者の職業は専業農漁業だけでなく林業、鉱工業、酪農、商業、原発関係、公務員、むつ市への就労、出稼ぎ等となっている。また、集落ごとに、それぞれ特性、風俗、習慣、伝統を持っており、集落内での結びつきは密接である反面、集落間の結びつきは弱く、生徒のコミュニケーション能力も不足しているため、人間関係で悩む生徒が多い。

また、こども園や小学校が併設されており、保幼小中の一貫した教育に力を入れている。

### 2 学校経営方針

○教育目標 知性を磨き、豊かな心を育み、自主自立を目指す生徒の育成

- 努力目標
- ・進んで学習し、課題解決できる生徒
  - ・互いに思いやり、明るく生活できる生徒
  - ・心身を鍛え、ねばり強く取り組むことができる生徒

○めざす生徒像 「言える 動ける 支え合う」生徒

- (1) 教育活動の基盤となる温かい人間関係づくりに努め、安心して生き生きと学校生活を送れるよう生徒一人ひとりに応じたきめ細かな教育活動や生徒指導を推進する。
- (2) 生徒が自らの生き方を考える中で、学びの意義を認識し、生涯学び続ける姿勢を身につけることができるよう、教育活動全体を通じた組織的・計画的なキャリア教育を推進する。
- (3) 学力の3要素を、「学んだ力」【基礎的・基本的な知識や技能】、「学ぶ力」【学んだ力を活用して課題を解決するための思考力・判断力・表現力】、「学ぼうとする力」【主体的に学習に取り組む意欲や態度】として捉え生徒が、主体的・対話的で深い学びを通して「確かな学力」を身に付けることができるよう、言語活動の充実を図りながら、一人一人の能力適性に応じた指導と学習習慣の育成に努める。
- (4) 心の教育の基盤となる道徳教育やお互いが支え合う共生など「豊かな心」の育成に努める。
- (5) 自立した人間としてたくましく生き抜いていけるよう、心身の健康課題に適切に対応する健康教育や望ましい食習慣の形成を図る食育など、「健やかな体」の育成に努める。
- (6) 教職員は、より良い人間関係の中で経営参加し、生徒・保護者・地域から信頼される学校づくりに努める。
- (7) 東通小学校・こども園の教育のあり方やつながりを理解し、相互に連携・協力して「保幼小中一貫教育の推進」に努める。

## II 研究の概要

### 1 研究主題

アセスメントツールを活用した組織的な支援のあり方についての研究  
—教育活動全体を通じた思いやりの育成と居場所づくり、人間関係づくりを通して—

## 2 主題設定の理由

統合前にそれぞれの学校が持っていた伝統や文化、個性や特徴といった校風がリセットされ、統合して10年目を迎える現在でも、生徒の所属感や自己肯定感、自尊感情が低い状態が続いている。学区が広く集落間の結びつきも弱いため、学校外で人間関係を作ったり、調整したりする機会が極端に少なく、人間関係を調整したり、コミュニケーションを図ったりするスキルが不足している生徒が多い。また、今現在、8名の不登校生徒を抱えているが、その要因としては人間関係だけでなく、学力不振による自己肯定感の低下や愛着障害、自閉傾向等多岐にわたっている現状である。

そこで、アセスメントツール等を活用して、適応感や道徳性、不安や悩みを把握し、客観的で正確な生徒理解に基づき、それぞれの特性に応じた支援を組織的に行うことが、思いやりを育み、適応感や自己肯定感、自尊感情の向上につながり、安心して学校生活を送ることができるようになることを明らかにしたいと考え、本主題を設定した。

## 3 研究の目標

思いやりを育み生徒が安心して生活できる学校づくりのために、アセスメントツールを活用した正確な生徒理解に基づいた組織的な支援（主に道徳の時間を要とした教育活動全体を通じた道徳教育や、一人一人が輝ける居場所づくり、トレーニングプログラムを活用した人間関係づくり）が有効であることを実践を通して明らかにする。

## 4 研究方法の概要

### (1) 校内体制の整備について

- ① 研修主任を中心に校内研修の主題として取り入れ計画的な研究を推進する。
- ② 特別支援コーディネーターを中心に拡大特別委員会を開催し、特別支援学級だけでなく、特別な支援を必要とする全ての生徒への合理的な配慮を行う。
- ③ 不登校や学力不振等、特別な支援が必要な生徒に対して適応教室を開設し、校内での居場所を確保するとともに、集団や学習に対する適応力を高める。

### (2) いじめの予防、早期発見・早期対応の観点から

- ① 月1回生活アンケートを行い、生徒の不安やいじめの有無を把握するとともに、その結果を随時教育相談に生かす。
- ② いじめの認知を積極的に行い、軽微ないじめやいじめに発展する可能性のある事案についても認知・報告して共通理解を図り、指導・経過観察を行い解決を図る。

### (3) 地域の人材等の活用の観点から

- ① 地元企業の講演や研修会、地元の特別臨時講師等の活用によりキャリア教育を充実させる。
- ② SC、SSW等の活用により家庭、保健師、教育相談室等との連携を図る。

### (4) 実態把握の観点から

- ① アセスの実施・分析を通して、学校環境適応感を把握する。
- ② HUMANの実施・分析を通して、道徳性を把握する。

- ③ 生活アンケートを毎月実施して、不安や悩み、いじめの有無を把握する。
- ④ 「自立へのステップアップチャレンジシート」を活用して、家庭での生活習慣や学習習慣、保護者の意識を把握する。

(5) その他

- ① 生徒会事務局が中心となって各行事や委員会活動を充実させ、生徒の主体的な活動を通して自己肯定感や所属感、自尊感情を高める。

5 研究経過

平成28年度

月	日	曜	研究会等	内 容 等	備考
4	5	火	校内研修	平成28年度校内研修計画の提案	
5	9	月	アセス①	アセスの実施	
6	6	月	校外研修	アセス活用講座（県学セ：田鎖）	
	15	水	校内研修	アセス活用講座の伝達講習（講師：田鎖）	
	22	水	校内研修	第1回授業研究会（1-1社会：浜田）	
	27	月	Q-U①	Q-Uの実施	
7	4	月	アセス②	アセスの実施	
	6	水	校内研修	第2回授業研究会（3-2道徳：田鎖）	
	25	月	小中合同研修	講演：グループアプローチを用いた人間関係作り （講師：青森県総合学校教育センター教育相談課 川崎陽子指導主事）	
8	23	月	校内研修	アセスの分析と具体的な支援について（講師：田鎖）	
9	13	火	校内研修	講演：アセスの効果的な活用と具体的な支援の方法 （講師：青森県総合学校教育センター教育相談課 柴谷崇之指導主事）	
	21	水	校内研修	第3回授業研究会（2-1理科：本間）	
10	18	火	校内研修	Q-Uの活用と分析について（講師：田鎖）	
	22	土	校外研修	秋田県学力向上フォーラム横手ブロック（12名参加）	
	26	水	校内研修	第4回授業研究会（3-1道徳：川島）	
11	7	月	先進校視察	誰もが行きたくなる学校づくり事業（ピアサポート、SEL、共同学習、品格教育、PBIS）視察 （岡山県総社市立総社西小学校、総社西中学校：工藤）	
	15	火	要請訪問	集中授業及び研究協議会（1-1国語：利木）	
	29	火	校外研修	下北道徳教育研究会授業研修会（2-2道徳：石崎）	
12	2	金	Q-U②	Q-Uの実施	
	8	木	講師派遣	講演：道徳教育新時代「特別の教科道徳」に求められる授業づくり （講師：秋田公立美術大学 毛内嘉威教授）	
	19	月	アセス③	アセス実施	
1	25	水	校内研修	Q-U、アセスの分析によるケース会議（講師：田鎖）	
2			生徒会活動	サクラ咲くキャンペーン	

平成29年度

月	日	曜	研究会等	内 容 等	備考
4	5	水	校内研修	平成29年度校内研修計画の提案	
	19	水	アセス①	アセスの実施	
	25	火	HUMAN	道徳性診断検査HUMAMの実施	
5			生徒会活動	きずなキャンペーン～魅せる！わたしたちの色～	
	24	水	校内研修	アセスの分析と実施トレーニングプログラムの検討（ワークショップ）	
6			生徒会活動	ツナグキャンペーン～心を届けよう～	
	6	火	校外研修	アセスを用いた学級経営実践発表（県教セ：田鎖）	

7	5	水	校内研修	第1回授業研究会（3-2 道徳：田鎖）	
	7	金	アセス②	アセスの実施	
8	23	水	校内研修	HUMAMの結果の考察について（講師：田鎖）	
9			生徒会活動	ツナグキャンペーン～心を届けよう～	
	27	水	校内研修	第2回授業研究会（1-1 英語：畑中）	
10	25	水	校内研修	思いやりを育む安心できる学校づくり実践研究事業研究発表会に向けての確認等	
	30	月	研究発表会	【公開授業】 1-1：学級活動（T1 竹内、T2 藤本・利木） 1-2：道徳（石崎） 2-1：学級活動（藤田）      2-2：英語（久保田） 3-1：理科（賀佐）          3-2：道徳（鎌田） 【講演】 思いやりを育む安心できる学校づくり ～道徳の教科化に対応した授業改善を通して～ （講師：秋田公立美術大学 毛内嘉威教授）	
11			生徒会活動	学力アップキャンペーン	
	15	水	要請訪問	集中授業及び研究協議会（1-2 数学：川島・木村）	
	17 18	金 土	校外研修	秋田県学力向上フォーラム秋田ブロック（7名参加）	
12			生徒会活動	思い出のモーザーキャンペーン	
1	29	月	アセス③	アセスの実施	

### Ⅲ 研究の実際

#### 1 校内体制の整備について

##### (1) 研修主任を中心に校内研修の主題として取り入れ計画的な研究を推進する。

平成28年度は「基礎基本の定着を図り、主体的に学ぶ姿勢を育てる指導法の工夫～生徒指導の機能を生かした授業改善を通して～（全教科・全領域）」という主題で、学力に焦点を当て、本事業とは独立した計画を立てていたが、研究の柱が2本だと労力が分散され、どちらも成果を出すことができないという反省から、平成29年度は本事業に焦点を合わせて「思いやりの心を持ち、お互いに高め合う生徒の育成～道徳と教科・領域との関連を図る指導法の工夫～（全教科・全領域）」という主題で研究を進めてきた。

道徳の教科化を念頭に置き、道徳の時間の確実な実施と授業改善を中心に、道徳の時間を要とした教育活動全体を通じた道徳教育によって思いやりの心を育むために、2年間にわたり秋田公立美術大学の毛内嘉威教授を招聘して、道徳の教科化に対応した授業改善について講演していただくとともに、教育課程説明会に全教員が参加し、新学習指導要領についての理解を深めた。

また、「道徳実践記録表」を毎時間作成し、道徳の時間の確実な実施と資料やノウハウの蓄積に努めたほか、「学校生活・授業の中で大切にしたい8つのこと」を設定し、特別活動や各教科の授業においても道徳教育の視点を取り入れた授業を実践した。

そのほか、一般研修においては、アセスやHUMANの結果を分析し、正確な生徒理解に努めるとともに、ワークショップで支援が必要な生徒に対して、具体的で継続可能な支援の方法を検討し、学級や学年、学校全体の取組として組織的に実施した。さらに、各学年の実態に合わせて、SGE、SST、SEL等のトレーニングプログラムを実施し、人間関係づくりや適応感、所属感、自尊感情、自己肯定感を高める取り組みを行った。

思いやりを育む安心できる学校づくり実践研究事業研究発表会においては、道徳の時間の授業改

善を提案した石崎教諭と鎌田教諭の道徳授業、SGEを取り入れた人間関係づくりを提案した竹内教諭と藤田教諭の学級活動、道徳の視点を取り入れた教科の授業を提案した久保田教諭の英語と賀佐教諭の理科の授業を公開した。

第 学年 月 第 週 ( 月 日実施)	
主 題 名	内容項目 - ( )
資 料 名	
ね ら い	
展 開 の 大 要	導 入
	展 開
	結 末
反 応・反 省 等	

「道徳実践記録表」

**学校生活・授業の中の  
「大切にしたい8つのこと」**

- ① **自分**は人の役にたっている。
- ② **自分自身**を認める、他の人のことを認める。
- ③ **思いやりの気持ち**、**気遣いの気持ち**を大切に**する**。
- ④ **すべての人・物・時**に感謝の**気持ち**を持つ。
- ⑤ **すべての命**を大切に**思う**。
- ⑥ **学校生活**は**みんな**で**つくる**。
- ⑦ **集団生活**の**向上**のために、**役割**と**責任**を持つ。
- ⑧ **奉仕**の**気持ち**を大切に**する**。

「学校生活・授業の中で大切にしたい8つのこと」

(2) 特別支援コーディネーターを中心に拡大特別委員会を開催し、特別支援学級だけではなく、特別な支援を必要とする全ての生徒への合理的な配慮を行う。

特別支援学級の生徒だけでなく、学校生活に不適応を示している生徒や学業不振の生徒等に対し、随時拡大特別委員会を開いて、実態の共有や具体的な支援、合理的な配慮について話し合った。学担任せにしたり、学担が一人で抱え込んだりすることのないように、主任や教頭を帯同しての家庭訪問やSC、SSWとの連携、校長による保護者面談等、組織的に対応している。

(3) 不登校や学力不振等、特別な支援が必要な生徒に対して適応教室を開設し、校内での居場所を確保するとともに、集団や学習に対する適応力を高める。

本校の適応教室は、通室者本人の意志決定を大切にしながらも、学習指導要領に沿ったカリキュラムを編成し、専科の教員が教科の授業を行えるように時間割を組んで対応した。また、集団に対する不適応を示している生徒もいるため、2つの教室を準備したり、教室内をパーティションで仕切ったりして、個に対応した指導を行っている。通室している生徒の予定や反省を記録するファイルのほか、教科担任が気付いた支援のヒントや申し送り事項等を記録するファイルを活用している。

## 2 いじめの予防、早期発見・早期対応の観点から

(1) 月1回生活アンケートを行い、生徒の不安やいじめの有無を把握するとともに、その結果を随時教育相談に生かす。

「生活態度チェックシート」は、いじめの調査も兼ねたものになっている。また、本校の課題として、帰宅後のスマートフォンやゲーム機の利用時間が長く、家庭学習の時間を確保できていないことが挙げられているので、県で作成した「スマートフォン、ゲーム機、音楽プレイヤーなど 考えよう！使い方のルール」のリーフレットの内容を調査項目の中に加えている。

さらに、昨年度までは、自由記述欄を設けていたが、自分だけが記入する事への抵抗感もあり、空欄で提出されることが多く、いじめ等の情報を吸い上げることができていなかったため、今年度からは、その他の欄として選択式にし、必ず全員が記入する形式にすることで負担感を減らしている。

○の数が少ない生徒や、いじめ等に直結する項目が空欄の生徒、その他の欄の情報等を元に、気になる生徒については随時教育相談を実施し、相談内容等を個人カードに記録するようにしている。

生活態度チェックシート（平成29年 11月分）		生徒指導部	
今週で11月が終わり、12月に突入します。自分たちの生活を振り返り、自分のこと、仲間のことを考えたいと思います。自分の心の中を正直に書いてください。			
		____年 組 ____番氏名	
該当する項目に、○をつけてください。			
言える	1	朝のあいさつを毎日心がけた	
	2	授業中、発表することができた	
	3	呼ばれた時、返事をすることができた	
	4	「ありがとうございます（ました）」と感謝の気持ちを伝えた	
	動ける	5	勉強道具の忘れ物はなかった
		6	自分から進んで係活動に取り組んだ
		7	清掃用具の後始末をきちんと行った
		8	部活動に積極的に取り組んだ
		9	不要物（例 スマホ、ゲーム機、ガム、アメ）を持ち込まなかった
		10	<b>スマホ、ゲーム、インターネットなど夜9時以降あまり利用しなかった</b>
		11	<b>スマホ、ゲーム、インターネットなど1日2時間以内にした</b>
		12	安全なスクールバス利用（座席移動、シートベルト）を心がけた
支え合う		13	友達と仲良く生活できた
		14	私は、いじめられていない
		15	他人をバカにしない生活を選った
		16	他人の悪口をネット上に書き込まなかった
	17	自分の持ち物が、無くならなかった	
	18	仲間はずれにされていない	
	19	友達に無視されていない	
	20	クツにいたづらをされていない	
	21	友達との関係で、イライラすることはない	
	22	友達に嫌なことをされていない	
	23	自分ほのびのび生活することができた	
○の数の合計を記入			
<small>&lt;その他&gt;</small> あなたから見て、学校生活の様子で、気になることがあったら番号に○をつけて下さい。気にならなかったら、⑮に○をつけて、今月の反省点（勉強、部活動、行事、バス乗車態度などについて）を一言で記入して下さい。 ①気に入っているあだ名を一方的に言われた ②友達をとられた ③仲間はずれにされた ④集団で無視された ⑤いやがらせの電話や手紙をもらった ⑥持ち物にいたづらされた ⑦貸したお金を返してもらえない ⑧お金をおどし取られた ⑨万引きをしようと言われた ⑩いやな行為を無理やりさせられた ⑪いつもブレス技を一方的にかけられる ⑫衣服を脱がされた ⑬けんかではなく、一方的にたたかれた。 ⑭その他( ) ⑮特になし 今月の反省			

「生活態度チェックシート」

(2) いじめの認知を積極的に行い、軽微ないじめやいじめに発展する可能性のある事案についても認知・報告して共通理解を図り、指導・経過観察を行い解決を図る。

いじめ防止対策推進法に規定するいじめの定義を再確認すると共に、文部科学省から出されている「いじめの認知について」を資料として、全職員で共通理解を図った。

好意から行ったが意図せず相手を傷つけてしまった場合や本人がいじめを否定した場合、けんかの捉え方についてなど、資料に載っている具体例を用いて研修を深めることで、職員の意識を変革し、細かな生徒観察といじめられている生徒の立場に立った認知を促すことができた。また、単に認知するだけにとどまらず、生徒指導主事を中心に学年組織として早期に対応することができた。

## 3 地域の人材等の活用の観点から

(1) 地元企業の講演や研修会、地元の特別臨時講師等の活用によりキャリア教育を充実させる。

地元のデザイン会社の方を特別臨時講師として招聘し、修学旅行のPR活動で使用するポスターやリーフレットの作成、職場体験時のマナー、東通のジオサイトの紹介等、全ての学年の東通科（総合的な学習の時間）の学習で講義、演習等を行っていただいた。東通村の魅力を伝えるむらづくり団体である東通★東風塾（ひがしどおり★やませじゅく）の副塾長を務めている方でもあり、生徒たちは東通村の魅力について学ぶと共に、故郷の魅力を再発見し、郷土愛を深めることができた。

また、東北電力、東京電力、防衛装備庁等の地元の企業や団体に協力していただき、猿ヶ森の砂丘体験やJAXA講演会、環境エネルギー教室、放射線教室等を実施した。はやぶさの開発に携わったJAXAの山田教授のご講演等、専門的な知識も織り交ぜながら、子どもたちの将来に夢と希望を与えてくれる貴重な機会となった。

## (2) SC、SSW等の活用により家庭、保健師、教育相談室等との連携を図る。

不登校生徒の支援を中心に、SSWとほぼ毎週連絡を取り合いながら随時訪問していただき、家庭訪問の帯同や保護者との面談等、さまざまな支援をしていただいた。また、保健師、福祉専門監、東通村教育委員会、下北教育事務所、むつ市教育委員会相談室等、様々な機関にもつないでいただいた。学校だけでは解決できない問題でも、各機関と連携を図りながら対応することで、解決につながっていくのだということを実感した。

SSWの呼びかけで、社会福祉協議会が主催するケース会議を月に一度開き、情報の共有や今後の支援について、各機関と連携し方針とすりあわせながら進めることができた。主に3年生の不登校生徒3名について話し合っているが、その他の生徒についても、気になる生徒がいる場合は情報交換等を行っている。

月1回、SCによるカウンセリングを実施している。情報を共有して今後の指導方針を検討すると共に、専門的な見地から医療機関へつないでいただくなど、家庭や関係機関との連携を図りながら進めている。

## 4 実態把握の観点から

### (1) アセスの実施・分析を通して、学校環境適応感を把握する。(年3回実施)

#### 【1学年】

適応次元	平成28年度			平成29年度			合計平均
	第1回目	第2回目	第3回目	第1回目	第2回目	第3回目	
生活満足感	/	/	/	59	59		59
教師サポート	/	/	/	63	65		64
友人サポート	/	/	/	61	64		62
向社会的スキル	/	/	/	63	65		64
非侵害的關係	/	/	/	63	64		63
学習的適応	/	/	/	61	65		63

#### 【2学年】

適応次元	平成28年度			平成29年度			合計平均
	第1回目	第2回目	第3回目	第1回目	第2回目	第3回目	
生活満足感	50	51	48	51	50		50
教師サポート	60	59	60	60	61		60
友人サポート	55	58	58	56	54		56
向社会的スキル	53	55	53	55	53		53
非侵害的關係	60	53	57	56	57		56
学習的適応	54	51	49	48	48		50

【3学年】

適応次元	平成28年度			平成29年度			合計平均
	第1回目	第2回目	第3回目	第1回目	第2回目	第3回目	
生活満足感	52	54	52	55	53		53
教師サポート	58	57	58	59	61		58
友人サポート	53	55	55	57	56		55
向社会的スキル	56	57	57	55	56		56
非侵害的關係	58	59	61	58	60		59
学習的適応	51	52	53	52	52		52

(2) HUMANの実施・分析を通して、道徳性を把握する。(年1回実施)

【1学年】

	内容項目	解答	道徳的価値の様子	学年	全国	
視点1	向上心	Ⅲ	反省が不足しており、自分を高める努力も不足している。	19	13	↑ 6

【2学年】

	内容項目	解答	道徳的価値の様子	学年	全国	
視点1	節度	Ⅳ	自分の生活をあまり見直そうとせず、度を過ごすことが多い。	25	17	↑ 8
	向上心	Ⅲ	反省が不足しており、自分を高める努力も不足している。	22	13	↑ 9
視点3	自然愛	Ⅲ	自然に対して比較的関心が薄く、自然環境を大切にしないことが多い。	23	16	↑ 7
	畏敬の念	Ⅲ	美しいものに感動する心や、人間の力を超えた見えないものに対する畏敬の念を持つことが少ない	23	16	↑ 7

【3学年】

	内容項目	解答	道徳的価値の様子	学年	全国	
視点1	節度	Ⅲ	自分の生活を見直すことを怠りがちで、節度・節制に欠けやすい。	39	32	↑ 7

(3) 生活アンケートを毎月実施して、不安や悩み、いじめの有無を把握する。

(4) 「自立へのステップアップチャレンジシート」を活用して、家庭での生活習慣や学習習慣、保護者の意識を把握する。

生活習慣の記録表に県教委の「スマートフォン、ゲーム機、音楽プレーヤーなど 考えよう！使い方のルール」のリーフレットを添付したものを使用する。

5 その他

(1) 生徒会事務局が中心となって各行事や委員会活動を充実させ、生徒の主体的な活動を通して自己肯定感や所属感、自尊感情を高める。

① サクラ咲クキャンペーン

ねらい ・キャンペーンを通して委員会活動の活性化を図るとともに、各委員会独自の取組を推進し充実した委員会活動を生徒たちの力で創り上げ継続する。

活動内容・放送委員会→テーマを決めて3年生にインタビュー、卒業ソングを3年生にアンケート

・学年委員会→頑張れ受検生！応援メッセージ作成（1、2年生から3年生へ）

② きずなキャンペーン～魅せろ！わたしたちの色～

ねらい ・キャンペーンを通して、縦割で団結し、体育祭に臨める雰囲気を生徒たちの力で創り上げるとともに、後輩への激励の気持ち、3年生への感謝の気持ちを持たせる。

活動内容・それぞれの広報リーダーを中心とし、縦割学級に、それぞれ激励メッセージを贈る。

・1、2年の縦割副リーダーを中心とし、学級ごとに3年生に感謝メッセージを贈る。

③ ツナグキャンペーン～心を届けよう～（中体連夏季大会前と中体連秋季大会前）

ねらい ・キャンペーンを通して、相手を思いやる気持ちを育むとともに、個々を認め合い、安心して通うことのできる学校を生徒たちの力で築く。

活動内容・部活動ごとに玄関ホール、オープンスペースであいさつ運動をする。

④ 学力アップキャンペーン

ねらい ・キャンペーン活動を通して、家庭学習に取り組む意欲を向上させるとともに、家庭学習習慣の定着と、充実した内容で取り組む意識を高める。

活動内容・学級ごとに、家庭学習ノートの取組ページ数を競う。

・内容が充実しているものや工夫が見られるものを掲示して紹介する。

⑤ 思い出のモーギーキャンペーン

ねらい ・話し合い活動の場を作り、4月から12月の学級を振り返る。

活動内容・学級ごとに、今年を象徴する漢字を1字決め、その理由も考える。

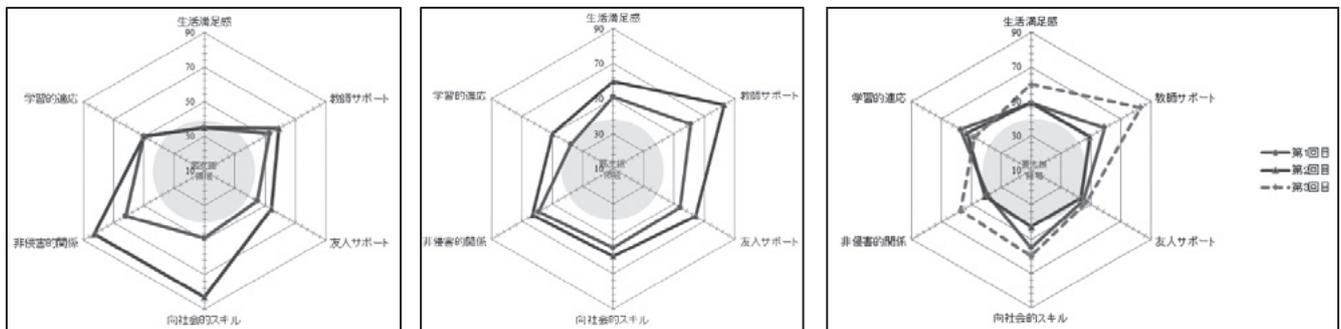
・色紙に漢字をデザインし、生徒集会で発表すると共に、玄関ホールに掲示する。

#### IV 成果と課題

##### (1) 成果について

##### ① 学校環境適応感の上昇

学級や学年全体での大きな変容は見られないが、個別の支援による個の変容が見られた。



【1年男子】

【2年男子】

【3年女子（H28時）】

##### ② 不登校生徒の好ましい変容

さまざまな要因から、家庭で過ごすことが多かった不登校生徒が、学級へ復帰したり、教育相談室や適応教室で過ごしたりすることができるようになった。

生徒A 8月から学級復帰、欠席2日

生徒B 4月から教育相談室や適応教室へ通室、欠席43日

生徒C 9月から教育相談室へ通室、欠席18日

生徒D 9月から教育相談室へ通室、欠席22日

生徒Aについては、2学期の始業式から全ての活動に参加しているため、エネルギー切れが懸念されたが、今日までほとんど休みなく登校している。生徒Bは教育相談室や適応教室へ通

うようになり、徐々に学校で活動する時間が増えた。現在は朝から退下時刻まで適応教室で活動している。生徒C、Dは福祉専門監の送迎で教育相談室へ通室している。福祉専門監には、保護者が送迎できない生徒への支援だけでなく、生徒の生活環境の整備などさまざまな面で支援していただいている。

③ 生徒の主体的、自治的活動による自己肯定感や所属感、自尊感情の高まり

生徒会事務局が中心となって、さまざまなキャンペーン活動や創作活動に取り組み、各行事や委員会活動を充実させることができた。「文化祭を成功させる集いで、パフォーマンス発表をしたい。」等、生徒が自らアイデアを出し、主体的に取り組む姿が見られるようになった。また、行事や学校生活をより良くしようという生徒の主体的、自治的な活動を通して、自己肯定感や所属感、自尊感情の高まりが感じられる。

④ 道徳の授業の実質化と授業改善

道徳の時間を35時間しっかりと行うことや多様で効果的な道徳教育の指導方法の改善、考える道徳、議論する道徳への転換、生徒が多様な感じ方や考え方に接する中で、考えを深め、判断し、表現する力などを育むための言語活動の充実、問題解決的な学習、道徳的行為に関する体験的な学習等を意識し、研修を深めることができた。

⑤ 教師の意識の変容と資質・能力の向上

校内研修や各種研修会等への参加を通して、個別に支援を必要としている生徒への配慮は決して甘やかしなどではなく、具体的で合理的な配慮に基づく支援が必要であるという意識を持つようになった。また、アセスやHUMAN、生活態度アンケート等を活用して正確な生徒理解を行うと共に、より具体的な支援の方法について工夫し、実践できるようになった。

## (2) 課題について

残念ながら2年間の取り組みが、思いやりを育み安心できる学校づくりのために有効であったという確証を得ることはできなかった。しかし、総社市の実践でも、不登校生徒の減少という数値で明確に成果が現れたのは事業を始めて4年目からである。本校としては、アセスメントツールを活用した組織的な支援のあり方についての研究を、2年間の事業のためだけのものとはしないで、今後も継続していきたい。

また、総社市で素晴らしい成果を挙げている要因として、学区の幼小中全てで同じ取り組みをしているということが挙げられる。つまり3年間だけではなく、もっと長いスパンで継続して取り組むことが必要だと考えられる。幸いにして、本校は東通村唯一のこども園、小学校、中学校が併設しており、12年間を見通した一貫教育を推進しやすい環境にある。今後はこども園や小学校とも連携を深めて取組を進めていきたい。

アセスメントツールは、実施しただけでは意味がなく、分析に基づいた正確な生徒理解と特性に応じた具体的な支援を工夫し、実行して、初めて効果があることを実感した。本事業を通して、ノウハウを身につけた本校の職員たちが、下北の地に散らばり、それぞれの地で実践していくことこそ、本事業のねらいなのではないかと思うし、そうなるべく、東通スタンダードと呼べる指導法を確立していきたい。

# 八戸市立鮫中学校

---

**居心地の良い学級づくり**  
～すべての生徒が集中して学習に  
取り組める指導の工夫～



## I 学校の概要

### 1 学校の概要

八戸市の東北端、眼下に太平洋及び八戸港を眺望できる高台に位置している。全校生徒数は198人（1学年63人、2学年78人、3学年57人）、各学年2クラスの小規模校である。家庭状況としては、地元根付いた家庭や親子三代で生活している世帯が多く、新たに転居してくる人は少ない。

これまで、本校では、学校・家庭・地域が一体となり、様々な教育活動を展開してきた。中でも、生徒自らが互いに非行防止を呼びかけ合う「万引きしま宣言」や、地元「蕪嶋祭り」や「さめ浜祭り」での青少年非行防止啓発活動等では、生徒と地域の方々がともに非行防止を呼びかけ、青少年の健全育成に大きな成果を挙げている。

### 2 学校経営方針

教育目標	ともに生きる・ともに学ぶ
------	--------------

努力目標	(1)生活づくり 時間を守り、はじめある生活をしよう	(2)仲間づくり 話し合い、ともに活動しよう	(3)頭づくり よく聞き、考え、ともに学ぼう
------	-------------------------------	---------------------------	---------------------------

学校目標	「基本的生活習慣の定着」と「志のある学習」
------	-----------------------

(1)学級活動の推進 (学級・学年)	<p>①基本的生活習慣の定着…学習三原則の徹底、学級話し合い活動の充実、生徒会・委員会・係活動の工夫、自主学習ノートの奨励等を通して、基本的生活習慣を定着させ学校生活を向上させる。</p> <p>②自他を尊重する態度の育成…行事や学校生活を通して、自己の役割を知り、他を認める態度を育てる。</p> <p>③家庭との連携…学級だよりの発行、電話訪問・家庭訪問の推進、面談・相談の充実を通して家庭との情報交換や連携を密にした学級づくりに取り組む。</p>
(2)学習指導の共通実践 (各教科)	<p>①基本的学習習慣の育成…学習三原則を徹底し、教え合い学び合う活動を通して基本的学習習慣を育成し、学力向上を図る。</p> <p>②学習意欲の喚起…導入や指導形態の工夫等による授業改善、基礎学力テストの充実、学習の手引きの活用を通して、自ら志（目標）をもって学習に取り組む態度を育成する。</p> <p>③コミュニケーション能力の育成…話を聞く姿勢を徹底し、意見や感想を発表する授業づくりを図る。</p>
(3)校内研修の推進 (全教職員)	<p>①全教職員の協同実践…校内研テーマを基に全教職員が協同実践に取り組む。</p> <p>②「アセス」の推進…アセス発表に向けて全校体制で取り組む。</p> <p>③「道徳」の充実…道徳の授業を充実・発展させ、資料を蓄積する。</p>

## Ⅱ 研究の概要

### 1 研究主題

『居心地の良い学級づくり』

～すべての生徒が集中して学習に取り組める指導の工夫～

### 2 主題設定の理由

本校生徒の実態として、「学ぶことに対する意義」の意識の低さ、「集団生活を向上させるための実践力」の弱さ、「コミュニケーション能力」の不足、以上の3点が課題として挙げられる。28年度は、授業における生徒指導として「学習三原則（課題の提出・1分前着席・授業道具の準備）」について、各授業で教師が声掛けをしたり、生徒会とも協力して課題の提出状況を調べたりするなど、学習への意識を高めてきた。また、アセス（学校環境適応感尺度）を実施することで、生徒個人の生活全体に対する満足感、教師や友人との関係、友人関係をつくるためのスキル、学習に対する満足感を測り、個人面談を中心に対応してきた。7月と11月に実施した結果を比べたところ、学校生活全体に対する満足感に上昇が見られたが、学習に対する満足感には変化が見られなかった。

29年度は上記の課題を受け、生徒同士がお互いの意見を交流したり、教え合ったりする授業を展開することで、学習に対する満足度の向上、学力の向上を図っていきたいと考え、研究主題を設定した。また、この研究を進めるうえで重要になってくるのは生徒間の人間関係である。アセスを活用することで人間関係の状態を把握し、さらには人間関係が良好になるスキルトレーニングを実施していく。

### 3 研究の目標

- (1)すべての生徒が、集団の一員としての自覚をもち、お互いに認め合える人間関係の構築や授業に集中できる学校・学級の雰囲気づくりを目指す。
- (2)学校環境適応感尺度「アセス」を実施し、生徒理解を深めるとともに、学級経営や指導の見直しを図りながら、思いやりのある生徒・学級の育成を目指す。
- (3)研究実践を通して、教員の指導力の向上及び協働性を高める。

### 4 研究方法の概要

- (1)グループワークトレーニングを定期的に行うことで、生徒が交流する場を意図的、計画的に設定し、指導や実践を通して生徒の思いやりの態度を養う。
- (2)学校環境適応感尺度「アセス」を実施し、教員間による指導方法の検討・実践・効果の検証を通して、協働で生徒理解を図る。
- (3)学級話し合い活動や全校話し合い活動のほか、各教科の授業において教え合いや学び合いを取り入れることで、お互いに認め合い、支え合える人間関係の構築を図る。
- (4)小学校と中学校で連携し、一貫性のある児童生徒の理解と指導に努める。

## 5 研究経過

【平成28年度】

期 日	内 容	備 考
〈1学期〉		
4月 1日	鯨中学校いじめ防止基本方針の策定	
4月15日	第1回学級話し合い活動	『部活動の問題点』
4月27日	校内研修（カウンセリングの進め方）	
5月 2日	学級団結祭	『長縄跳び・大声選手権』
6月 1日	校内研修（アセスについて）	
6月28日	校内研修（アセスの活用）	
6月30日	第1回アセス実施	
6月30日	第1回アセス結果の分析・対策	
7月 1日	第2回学級話し合い活動	『合唱練習の進め方』
7月14日	校内合唱コンクール	
7月21日	運動会結団式	
8月18日	小中連携協議会	
〈2学期〉		
8月28日	運動会	『全校ムカデ競争』
9月 9日	第3回学級話し合い活動	『秋季大会に向けて』
10月23日	文化祭	『全校制作』
11月 1日	第2回アセス実施	
11月 2日	第2回アセス結果の分析・対策	
11月 4日	第4回学級話し合い活動	『記念式典に向けて』
11月10日	生徒総会（全校による小グループ話し合い）	『記念式典に向けて』
〈3学期〉		
1月14日	教育相談冬期研修会（アセス実践発表）	『鯨中学校の取り組み』
1月28日	先進校視察	日本授業UD学会 筑波大学附属小
29日	↓	
2月 8日	校内研修（グループワークトレーニング）	

【平成29年度】

期 日	内 容	備 考
〈1学期〉		
4月 1日	鯨中学校いじめ防止基本方針の策定	
4月 4日	校内研修（グループワークトレーニング）	
4月13日	グループワークトレーニング①	『誰がどのクラス？』
4月14日	第1回学級話し合い活動	『記念式典に向けて具体的な取り組み』
4月26日	校内研修（グループワークトレーニング）	
4月28日	グループワークトレーニング②	『誰がどの座席？』

5月 1日	学級団結祭	『長縄跳び・ドッジボール』
5月 12日	グループワークトレーニング③	『先生当てクイズ』
5月 24日	校内研修（グループワークトレーニング）	
5月 31日	グループワークトレーニング④	『校舎探検』
6月 1日	第1回アセス実施	
6月 7日	第1回アセス結果の分析・対策	
6月 9日	グループワークトレーニング⑤	『島の謎を解け』
6月 22日	グループワークトレーニング⑥	『ぬり絵を完成させろ』
6月 28日	校内研修（グループワークトレーニング）	
7月 6日	グループワークトレーニング⑦	『とうもろこしができた』
7月 7日	第2回学級話し合い活動	『合唱練習の進め方』
7月 19日	校内合唱コンクール	
7月 20日	グループワークトレーニング⑧	『職員室のヒミツ』
7月 21日	運動会結団式	
7月 21日	第2回アセス実施	
7月 31日	小中連携協議会	
8月 18日	第2回アセス結果の分析・対策	
〈2学期〉		
8月 27日	運動会	『全校ムカデ競争』
9月 1日	グループワークトレーニング⑨	『遺跡平面図』
9月 7日	研究発表会	
9月 8日	第3回学級話し合い活動	『秋季大会に向けて』
9月 21日	校内研（道徳を中心とした人間関係づくり）	
10月 22日	文化祭	『全校制作』
11月 2日	第4回学級話し合い活動	『基本的な生活習慣について』
11月 29日	校内研（道徳を中心とした人間関係づくり）	
12月 11日	第3回アセス実施	
12月 15日	第3回アセス結果の分析・対策	
〈3学期〉		
1月 25日	校内研修（まとめ）	

### Ⅲ 研究の実際

#### 1 グループワークトレーニング

29年度前半（4月～9月）を『グループワークトレーニング』、後半（10月～3月）を『道徳を中心とした人間関係づくり』として、思いやりを育む安心できる学校づくりに取り組んできた。グループワークトレーニングに取り組むきっかけとなったのは、28年度のアセスの結果から向社会的スキルや友人サポートの数値に、本校生徒の人間関係づくりに対する弱さを感じたからである。

本校でグループワークトレーニングを実施する際に重要視したことは、話し合い、協力し合わなければ解決できない問題を設定すること。話し合いの中で、合意形成が行われる問題に取り組ませることの2点である。このことが、自分の考えや思いを話せる態度、相手の話を聞く態度、お互いを認め合う態度を養い、人間関係を良好にしていくものと考えている。

#### 【グループワークトレーニングの一例（教室で）】



男女混合4～5人のグループをつくり、1人に4～5枚のヒントカードが配る。ヒントカードの内容は他の人に見せず、言葉だけで伝える。リーダー役の人を毎回決め、その人の指示を中心に謎解きが進んでいく。



話し合いが進んでくると、身を乗り出して意見を交換するようになる。どのグループもお互いの距離が近くなり、ゲーム的な要素も含まれていることから、話し合いが白熱してくる。また、答え合わせは各グループ1回だけなので、各自がもっている情報を再度発表し、全体で確認するようになる。

#### 【グループワークトレーニングの一例（体育館で）】



ヒントをもとに、その条件にあてはまる先生をあてるという活動。先生方も各グループを回り、積極的にコミュニケーションをとっていく。いつもは各教室で行われるが、全校生徒を体育館に集めて1つのことに取り組むことで、全体の一体感を高めることができた。



問題用紙は各グループに1枚しか配られないため、自然とお互いの距離が近くなっていく。グループワークトレーニングでは、活動する際に何かの制限がある。その制限があるおかげで、話合いがより活発なものになる。

【グループワークトレーニングの一例（校舎を使って）】



ヒントカードにある写真の場所を校舎内から探し出す、オリエンテーリング的な活動。どの方向に進むかは、必ず班員で話し合っ決めてというルールがある。いつもは教室で座って活動しているが、動きを取り入れることでお互いの距離がより縮まるのではないかと考え実施した。



それぞれの学年だけが知っている、部活でトレーニングする場所にある、委員会で活動する場所にあるなど、グループ内で誰もがヒーローになれるように工夫した。また、普段何気なく生活している校舎を観察させたいというねらいもある。実際、友達の掲示物などをじっくり見て歩く姿が見られた。

## 2 公開授業（授業内容と授業者のねらい）

### ① 1年1組 学活 『自分の特長を知る』

4月から中学生として自己を高めようと努力し、成長が見られる中、幼稚な言動やからかいも見られ、自分の意見や考えを素直に言えない雰囲気もある。そのため、自己肯定感の低い生徒もいる。相手の良さを考えるとともに、自分の良さを再発見することで、正しい自己理解をし、自己を高めるために必要なことについて考えさせたい。



② 1年2組 道徳 『近くにいた友(友情、信頼)』

学級の様子を見ると、表面的な仲間関係にしがみついたり、無批判に相手に同調したりする様子を感じられる。自分が傷つくことを恐れて心を開かない関係から脱却し、真の友情とは何かについて考えるきっかけとし、より良い友人関係を築いていこうとする心情を育てたい。



③ 2年1組 道徳 『3分間(相互理解、寛容)』

相手がどう考えるか、どんな気持ちになるかを考えず、思いついたことを口にする生徒がいる。本人は楽しさや面白さをねらい、まわりも表面的な面白さだけをとりえて笑う。本時の資料を通して話し合うことで、物事を自分本位な見方でとらえてしまいがちであることに気づかせ、相手の対場や考えを認めようとする態度を育てたい。



④ 2年2組 学活 『コンプレックスについて考える』

思春期にさしかかった生徒達は、自我が芽生え、自分と他人を比べることによる劣等感を感じるが多くなっている。悩んでいる自分や現実を受け入れることで、自己を肯定的にとらえることが必要であると考え。友人の悩みを知り、互いの感じ方を話し合う中で、より共感的な人間関係をつくりたい。



⑤ 3年1組 学活 『グループワークトレーニング』

男女とも特定のグループの中で過ごすことが多く、全員が関わりをもちながら活動する場面は少なかったように思える。言葉で自分の気持ちを伝えたり、相手の気持ちを理解しようとしたりする力が不足しており、対人関係を構築する上での幼さがうかがえる。グループワークトレーニングを通して、言葉でお互いの伝えようとしていることを理解する力を身につけさせたい。



⑥ 3年2組 学活 『グループワークトレーニング』

自分の思いや考えを周囲に伝えることを苦手としている生徒が多い。学級のリーダーは、全体の方向性を導くことを苦手としている。今回の題材を通して、相手へ情報をはっきり伝える力や、自信をもって発言する力を高めさせたいと考える。このことが、良い人間関係を築くことにつながり、集団としてのまとまりが出てくるものと期待される。



### 3 アセスメントツールによる検証

#### (1) 学校全体としての結果

	生活満足感	対人的適応				学習的適応
		教師サポート	友人サポート	向社会的スキル	非侵害的關係	
H28.06.30	4 9	5 3	5 2	5 2	5 3	4 8
H28.11.01	5 2	5 3	5 3	5 3	5 4	4 8
H29.06.01	5 3	5 9	5 5	5 5	5 4	5 1
H29.07.21	5 4	5 9	5 6	5 7	5 5	5 1
H29.12.11	5 3	5 9	5 7	5 5	5 6	5 0

#### 【教師サポート】

アセスを実施するにあたり、学級担任が今まで以上に生徒一人一人に対する理解を深め、適切な支援を行ってきた結果であると考え。また、各学年でアセスの結果を分析し、共通理解の上で生徒に接してきたことも結果につながった。

#### 【友人サポート・向社会的スキル】

グループワークトレーニングを実施したことで、友達と意見を交わすことに抵抗がなくなり、授業の話合いや教え合いでも活発な活動が見られた。また、どの教育活動においても協働を意識した取り組みを行ってきた結果ともいえる。

#### 【学習的適応】

前述のとおり、各授業において意識的に教え合いや学び合いを取り入れてきた。その結果、生徒自身が疑問を解決しようとする姿勢、質問されたら相手が理解するまで教えようという姿勢が身についた。また、どの授業もわからないことを正直に質問できる温かい雰囲気で行われている。

#### (2) 個人分析

##### 【 生徒 A 】

	生活満足感	教師サポート	友人サポート	向社会的スキル	非侵害的關係	学習的適応
H29.06.01	4 1	5 2	4 3	3 7	5 1	4 6
H29.07.21	4 1	5 6	4 3	3 9	4 9	4 9
H29.12.11	4 1	5 4	4 3	4 9	4 9	5 5

日頃からおとなしく、休み時間にはひとりで過ごす様子もよく見られる。決まったメンバーで過ごすことはあるが、人付き合いに対しては消極的で、あまり自分から集団に入ろうとはしない。授業中も同様で、グループ学習などを設定しても友達に説明したり質問したりすることがなかった。しかし、グループワークトレーニングやグループ学習に継続的に取り組むことで、少しずつではあるが自分から質問できるようになってきた。

##### 【 生徒 B 】

	生活満足感	教師サポート	友人サポート	向社会的スキル	非侵害的關係	学習的適応
H29.06.01	5 1	4 7	4 3	3 7	5 4	5 4
H29.07.21	4 6	3 8	4 7	4 2	4 7	4 7
H29.12.11	5 6	4 9	5 2	5 4	4 9	4 5

コミュニケーション能力が低く、友達とうまくグループをつくれないう状態だった。また、登校を渋ることが時折見られたが、現在では改善されている。友達からの声掛けが増えたこと、自分から友達の輪に入っていくことができるようになったことが数値の上昇にも表れている。学習的適応の数値が下がっているが、友人関係が良好であることを活用し、グループ学習で支援していきたいと考える。

【 生徒C 】

	生活満足感	教師サポート	友人サポート	向社会的スキル	非侵害的關係	学習的適応
H29.06.01	4 9	4 9	4 5	4 0	4 5	4 2
H29.07.21	5 3	5 7	4 9	4 0	4 7	4 5
H29.12.11	5 5	4 9	5 1	4 9	5 3	4 8

もともと人間関係が良好な学年であり、困っている人や弱い立場の人に対して、手を差し伸べる生徒が多い。友人サポートや向社会的スキル、非侵害的關係の数値に向上が見られるが、個人面談等を通して、周りの人から自分に対する支援の多さに気づくことができたからではないかと考える。また、友達から認められているということを経験することで、学校生活全体に前向きに臨むことができるようになった。

【 生徒D 】

	生活満足感	教師サポート	友人サポート	向社会的スキル	非侵害的關係	学習的適応
H29.06.01	2 7	4 6	4 3	2 9	4 5	3 8
H29.07.21	3 1	4 6	4 3	2 5	4 5	4 2
H29.12.11	2 7	5 1	4 3	3 1	4 5	3 3

身辺整理ができない、困っていても自分から助けを求めることができないなど、さまざまな場面でまわりの生徒やスタディサポーターの支援が必要な生徒である。まわりの生徒もそれを理解し、よく声をかけてくれている。グループワークトレーニングには積極的に取り組んでおり、必要な情報を相手に伝えるトレーニングが実生活にも結び付いてきている。以前は、授業中にサポーターの人から声をかけられるのを待っていたが、自分から声をかけて質問する姿が見られるようになった。また、面談を通して、数値には表れない家庭的な要因について相談できたことも大きな収穫である。

【 生徒E 】

	生活満足感	教師サポート	友人サポート	向社会的スキル	非侵害的關係	学習的適応
H29.06.01	4 3	4 6	4 7	5 2	4 5	3 5
H29.07.21	4 5	4 6	5 1	5 8	5 1	3 3
H29.12.11	5 3	5 3	4 9	5 8	5 1	4 2

まわりとの調和がとれず、集団の中で浮いた存在になることがあった生徒である。状況を考えない発言や忘れ物の多さがその要因であると考えられた。学級担任との面談を通して、忘れ物をしないための対策、かばんやロッカー、自宅の部屋の整理整頓の仕方など、きめ細かい支援をすることで状況が好転したと考えられる。また、そのことが学習意欲にもつながっており、2学期以降授業への取組や宿題の提出状況も改善されてきている。

【 生徒F 】

	生活満足感	教師サポート	友人サポート	向社会的スキル	非侵害的關係	学習的適応
H29.06.01	49	40	26	69	26	31
H29.07.21	53	40	26	69	26	28
H29.12.11	62	40	31	63	26	33

ADHDの生徒で、多動性、落ち着きのなさが強く症状に出ている。相手の状況を考えずに話しかけたり、関わりをもとめたりするため、一部の生徒から疎まれている。このような生徒にもグループワークトレーニングは有効であると考えられる。リーダーの指示に従って必要な情報を話すこと。相手の意見を尊重し、発表を遮らないこと。協力することで課題を解決できる成功体験など、日常生活で教えることが困難なことを体験させることができるからである。生活満足感の数値が上昇しているが、学級以外での活躍の機会（部活動や学校行事）が多くあったことが要因であると考えられる。

#### IV 成果と課題

28年度は、アセス実施後、それぞれの学級担任の指導方法による対応が中心であった。29年度は学校全体としてグループワークトレーニングに取り組んだり、全授業を通して一貫して教え合いや学び合いを取り入れたりした。年間を通して継続的な取組ができたことがアセスの結果向上につながったと考える。また、何よりもアセスに取り組むことで教師が生徒一人一人の状態を把握し、適切な支援を行うことができたこと、学級担任だけでなく全教員が生徒に対して共通理解したうえで接することができたことが大きな成果である。

課題としては、グループワークトレーニングの継続とアセスを活用した小・中学校間の連携である。生徒からは「グループワークトレーニングは、もうやらないんですか」「楽しいからまたやりたい」という声が上がっている。生徒がグループワークトレーニングに意欲的であること、実際に効果が上がっていることを考えると、来年度以降も継続したい。また、29年度は小学校から現1年生が小学校6年生だったときのアセスのデータを引き継いだら、比較するだけにとどまってしまった。来年度は4月までにデータを引き継ぎ、入学当初からきめ細かい支援ができるようにしたい。

#### V 参考文献・資料

グループワークトレーニングを実施するにあたり、以下の本を参考にした。

- ・学校グループワーク・トレーニング
- ・協力すれば何かが変わる《続・学校グループワーク・トレーニング》

坂野公信 監修                      日本学校グループワーク・トレーニング研究会 著

# 平成28・29年度思いやりを育む安心できる学校づくり実践研究事業

## 1 事業目的

児童生徒のいじめをはじめとする、暴力行為、不登校等の生徒指導上の課題解決に向けて、教育活動全体を通じて豊かな心を育み、児童生徒一人一人が輝ける居場所づくりや他の人との絆づくりを図り、児童生徒が安心して生活できる学校づくりに向けた取組について実践研究を実施し、県内へ普及する。

その取組の一つとして、学校において、児童生徒の複雑な心理状態を客観的に把握するための心理検査を活用しながら、児童生徒の実態に合った学年・学級経営を行い、学校生活全体を通じて豊かな心を育み、児童生徒が安心して生活できる学校をつくるために教員の指導力向上を進めていく。

## 2 事業内容

### 【事業Ⅰ】思いやりを育む安心できる学校づくり実践研究

#### (1) 研究指定校

- ・思いやりを育み安心できる学校づくりに向けて実践研究を行う。
- ・教育活動全体を通じて、児童生徒一人一人が輝ける居場所づくりや仲間との絆づくりができるように、各学校は創意工夫をいかした取組をする。
- ・各研究指定校の児童生徒の実態把握のため、学校環境適応感尺度「アセス」を実施し、その結果を活用して、PDCAサイクルで実践研究を行う。(H28は2回、H29は3回)
- ・先進的な取組を行っている小・中学校へ視察に行き、各研究指定校の実践研究の参考にする。  
(指定校教員1回×2名、県外可能、H28のみ)
- ・外部人材を活用した校内研修の充実を開催したり、総合学校教育センターに講座に参加したりして教職員の資質向上を図る。(外部人材の報酬・旅費は2年間、学セの研修はH28のみ)
- ・指定校教員(1名)、教育事務所指導主事等が一堂に会し、連絡会議を開催する。実践研究について情報交換したり、取組について協議する。
- ・2年間の実践研究を発表する(地区研究発表会、H29開催)

#### (2) 教育事務所

- ・研究指定校への指導・助言を行う。
- ・連絡会議に出席する。(H28・29 各2回)
- ・地区研究発表会を開催する。(H29企画・運営)

#### (3) 28年度の事業概要及びその他参考となる事項

- ① 5月 第1回連絡会議、28年度実施計画書の提出(5月末まで)
- ② 6月 学セ「アセス」研修会参加
- ③ 7月 「アセス」学校環境適応感尺度の実施
- ④ 12月 第2回連絡会議、「アセス」学校環境適応感尺度の実施、  
「アセス」の結果を踏まえた校内研修会
- ⑤ 2月 28年度成果報告書提出
- ⑥ 年間 指定校実践研究(校内研修など)
- ※ 今年度 年2回「アセス」学校環境適応感尺度の実施する(次年度は3回)
- ※ その他の取組として、県内外への先進校視察

### 3 平成29年度の取組内容

#### (1) スケジュール

- ① 5月 第1回連絡会議、29年度実施計画書の提出（5月末まで）
- ② 7月 「アセス」学校環境適応感尺度の実施
- ③ 夏季休業中 各地区研修会、学セ研修、「アセス」の結果を踏まえた校内研修会等
- ④ 9月 「アセス」学校環境適応感尺度の実施
- ⑤ 10月～11月 各研究指定校実践研究発表会
- ⑥ 12月 第2回連絡会議、「アセス」学校環境適応感尺度の実施、  
「アセス」の結果を踏まえた校内研修会等
- ⑦ 1月 事業報告書提出

平成28・29年度 思いやりを育む安心できる学校づくり実践研究

作成委員

(1) 研究指定学校

	学 校 名	職 名	氏 名
1	青森市立油川小学校	校 長	鈴 木 新
		教 諭	鷺 尾 厚
2	中泊町立武田小学校	校 長	神 彰 彦
		教 頭	三 上 高 弘 (H28)
		教 諭	内 田 了 (H29)
3	大鰐町立大鰐小学校	校 長	前 田 了 二
		教 諭	菊 池 哲 子
4	おいらせ町立下田小学校	校 長	西 塚 徹 夫
		教 頭	畑 山 ゆかり (H28)
			熊 澤 尚 彦 (H29)
		教 諭	三 浦 大 嗣 (H28)
岩 谷 貞 俊 (H29)			
5	むつ市立第三田名部小学校	校 長	古 谷 吉 光
		教 諭	早 坂 真 悦
6	八戸市立鮫小学校	校 長	白 石 哲 志
		教 諭	大久保 行 泰
7	青森市立油川中学校	校 長	岩 田 靖 (H28)
			横 山 誠 之 (H29)
		教 諭	赤 平 朋 章
8	深浦町立大戸瀬中学校	校 長	長 内 勝
		教 諭	對 馬 宏 和
9	大鰐町立大鰐中学校	校 長	笹 日 出 美
		教 頭	古 川 一 夫 (H29)
			山 内 洋 一 (H28)
		教 諭	長 内 尚 明 (H29)
			秋 元 順 子 (H29)
鳴 海 孝 浩 (H29)			
10	東北町立上北中学校	校 長	中 村 廣 美
		教 頭	二 本 柳 淑 実
		教 諭	外 崎 綱 一
11	東通村立東通中学校	校 長	對 馬 寿 之 (H28)
			古 里 利 行 (H29)
		教 諭	折 館 涉 (H28)
			辻 浦 雅 仁
田 鎖 正 徳 (H29)			
12	八戸市立鮫中学校	校 長	蛭 名 多 賀 寿
		校 長	馬 渡 正 仁

なお、次の者が編集に当たりました

青森市教育委員会	指 導 主 事	木 村 文 俊
おいらせ町教育委員会	指 導 主 事	佐 伯 仁
中部上北広域事業組合教育委員会	指 導 主 事	佐 藤 豊
東通村教育委員会	指 導 主 事	中 村 徳 郎
むつ市教育委員会	指 導 主 事	服 部 秀
八戸市教育委員会	主 任 指 導 主 事	沼 舘 寿 朗
東青教育事務所	指 導 主 事	石 川 慎
西北教育事務所	指 導 主 事	竹 内 明 人
中南教育事務所	指 導 主 事	長 内 和 生
上北教育事務所	指 導 主 事	乗 田 育 人
下北教育事務所	指 導 主 事	岸 健 一 郎
三八教育事務所	指 導 主 事	武 内 慎 太 郎
総合学校教育センター	指 導 主 事	柴 谷 崇 之
県教育庁学校教育課	課 長	一 戸 利 則
〃	副 参 事	中 村 豊
〃	主 任 指 導 主 事	三 和 明 久
〃	主 幹	小 田 原 崇 文
〃	指 導 主 事	中 村 光 博
〃	指 導 主 事	工 藤 慶 憲

平成28・29年度  
思いやりを育む安心できる学校づくり  
**実践研究報告書集**

---

平成30年3月発行

発行者 青森県教育庁学校教育課  
〒030-8540  
青森県青森市新町二丁目3番1号  
電話番号 017-734-9880  
FAX番号 017-734-8270

平成28・29年度  
思いやりを育む安心できる  
学校づくり実践研究事業

思いやりを育む安心できる学校づくり

# 実践研究報告書集